

誕生地遺跡発掘調査概要 I

1995. 3

千早赤阪村教育委員会

はしがき

現在、多くの発掘調査が行われており、新聞やニュースからは毎日のように新発見の記事を目にします。本村でも、くすのきホール建設に先立って発掘調査を行ったところ、中世の遺跡が発見されました。本冊ではこの楠公誕生地遺跡の調査についての成果を報告します。

今回の調査からは、二重の堀で囲まれた鎌倉時代から南北朝時代にかけての城館を検出し、大きな成果がありました。遺跡名のとおり楠木正成（楠公）が誕生したという伝承のある場所に正成が活躍したころの遺構が確認されました。この遺跡は正成との関連性があると考えられます。

調査の実施にあたっては、多くの方々のご理解・ご協力をいただきましたことに対しましてお礼申し上げます。

今後とも本村の文化財行政にご理解・ご協力賜りますようお願い致します。

平成7年3月

千早赤阪村教育委員会
教育長 岩橋典彦

目 次

はしがき 千早赤阪村教育委員会教育長 岩橋典彦

例言

目次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に至る経過	3
第3章 調査の成果	
第1節 基本層序	4
第2節 遺構	9
第3節 遺物	24
第4章 まとめ	53

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	2
第2図 調査区位置図(1/1,200)	3
第3図 土層断面図	5～6
第4図 遺構配置図(1/400)	7～8
第5図 S D 1・2 断面図(1/80)	9
第6図 S V 1周辺遺構配置図(1/80)	11
第7図 S P 28・41遺物出土状況図(1/20)	12
第8図 S B 1平面図・断面図(1/80)	13
第9図 S B 2平面図・断面図(1/50)	14
第10図 S B 3平面図・断面図(1/80)	15
第11図 S D 9・11・12遺物出土状況図(1/20)	17～18

第12図	S K 1 遺物出土状況図(1/20)	19
第13図	S K 2 平面図・断面図(1/40)	19
第14図	S K 3 平面図・断面図(1/40)	20
第15図	S D 8 遺物出土状況図(1/20)	21
第16図	S P 45・46遺物出土状況図(1/20)	21
第17図	S P 471・476・477遺物出土状況図(1/20)	22
第18図	S S 2 平面図・断面図(1/40)	23
第19図	S X 1 遺物出土状況図(1/20)	23
第20図	S A 1・S B 2(1)出土遺物(1/4)	25
第21図	S B 2(2)・S D 1(1)出土遺物(1/4)	26
第22図	S D 1(2)出土遺物(1/4)	27
第23図	S D 2(1)出土遺物(1/4)	29
第24図	S D 2(2)出土遺物(1/4)	30
第25図	S D 3・S V 1 出土遺物(1/4)	31
第26図	S D 4(1)出土遺物(1/4)	33
第27図	S D 4(2)出土遺物(1/4)	34
第28図	S D 4(3)出土遺物(1/4)	35
第29図	S D 4(4)出土遺物(1/4)	36
第30図	S D 4(5)出土遺物(1/4)	37
第31図	S D 4(6)出土遺物(1/4)	38
第32図	S D 6 出土遺物(1/4)	39
第33図	S D 7・8 出土遺物(1/4)	40
第34図	S D 9(1)出土遺物(1/4)	42
第35図	S D 9(2)出土遺物(1/4)	43
第36図	S D 11・12出土遺物(1/4)	44
第37図	S D 13出土遺物(1/4)	45
第38図	S K 1(1)出土遺物(1/4)	46
第39図	S K 1(2)出土遺物(1/4)	47
第40図	S K 2 出土遺物(1/2)	47

第41図	S K 3・柱穴(1)出土遺物(1/4)	49
第42図	柱穴(2)・S X 1出土遺物(1/4)	51
第43図	石製品・錢貨(1/2)	52

図 版 目 次

- 図版 1 調査区全景
- 図版 2 堀状遺構(1)
- 図版 3 堀状遺構(2)
- 図版 4 堀状遺構(3)
- 図版 5 堀状遺構(4)
- 図版 6 建物遺構(1)
- 図版 7 建物遺構(2)・集石遺構(1)
- 図版 8 集石遺構(2)
- 図版 9 溝
- 図版10 土壙
- 図版11 柱穴
- 図版12 地鎮遺構

第1章 位置と環境

千早赤阪村は、大阪府の南東部に位置し、北は河南町、西は富田林市、東は御所市、南東は五條市、南西は河内長野市と接している。千早赤阪村の北半部は河南台地と呼ばれる河岸段丘が占める。東には金剛・葛城山脈、南には和泉山脈が走っている。

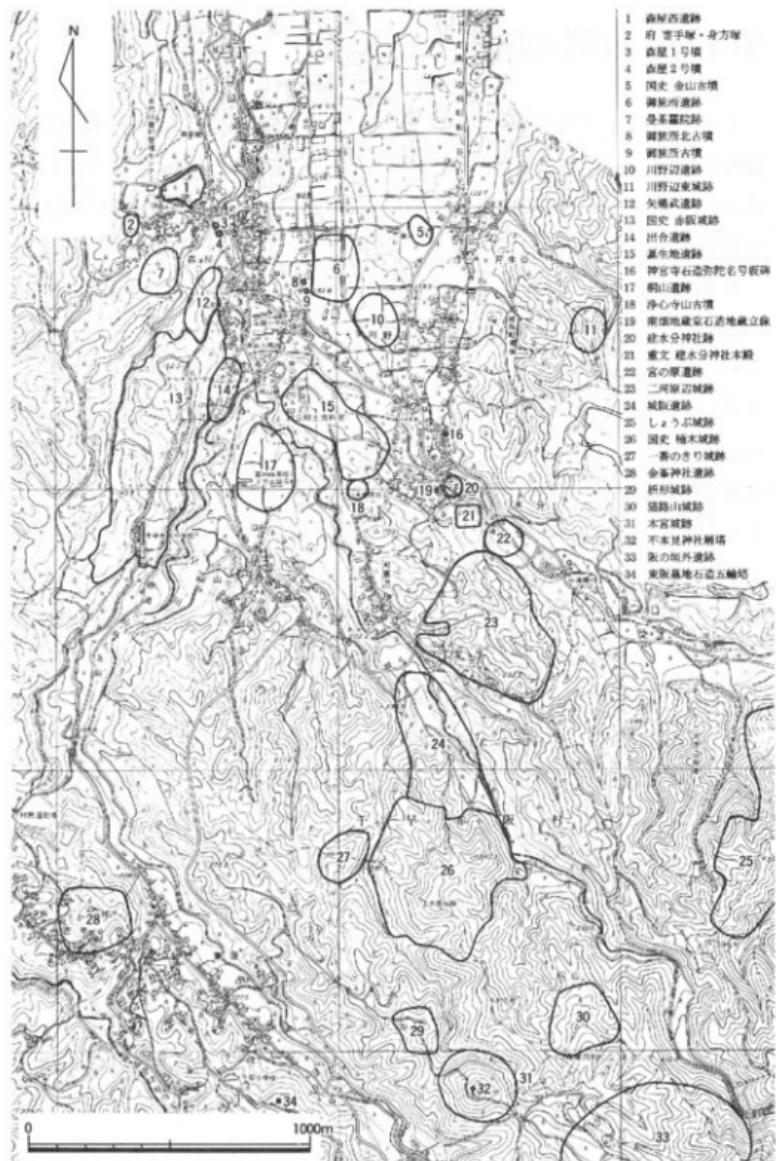
本遺跡の所在する千早赤阪村大字二河原辺・水分地区は河南台地の南東方、山麓に位置し、台地に流れこむ水越川・足谷川の間に位置する。

本村は楠木正成の本貫地といわれており、多くの中世の遺跡が所在している。その中でも大半が城跡・砦跡を占めており、すべてが南北朝に築城されたと言われている。本村には33ヶ所の城跡の所在が報告されている。そのうち、上赤坂城・下赤坂城・千早城は、昭和9年に国指定の史跡になっている。上赤坂城・千早城は早くから諸研究者によって紹介されており縄張り図も作成されている。上赤坂城からは、土師器皿、巴文を伴った軒丸瓦、鉄製品等が表採されている。

このほかに遺跡として周知されている城跡は少なく、3ヶ所（二河原辺城、本宮城跡、金峯神社遺跡）のみである。城跡は山城に分類されるもので、尾根ごとに別れて構成されている。平成2年度には二河原辺城跡、平成4年度には国史千早城跡にある大阪府立千早山の家再建に伴い発掘調査を行っている。

集落跡は誕生地遺跡・建武中興以降楠木邸跡（桐山遺跡）・出合遺跡・川野辺遺跡がある。桐山遺跡からは、三つ巴の模様を伴った軒丸瓦が表採されている。出合遺跡からは、役場浄化槽工事の立会の際、土師器皿等が出土している。これらの集落跡は、本格的な調査は行われていないが、中世を中心とした遺跡だと考えられる。

また、国史跡・遺跡のほかにも中世の建造物・石造文化財が所在している。建水分神社本殿は南北朝時代に建立されたもので、国重要文化財に指定されている。とくに石造文化財は多く、東阪不本見神社には凝灰岩製の層塔、森屋墓地には府指定の寄手塚・身方塚、千早墓地にも大型の五輪塔があり、中世の繁栄ぶりがうかがえる。

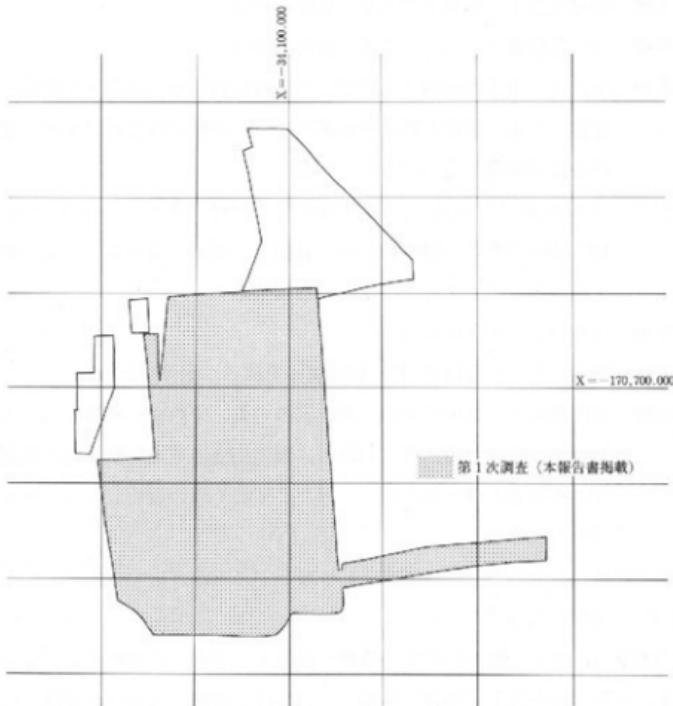


第1図 周辺遺跡分布図

第2章 調査に至る経過

平成2年度に誕生地遺跡地内に歴史の丘公園整備が実施されることになり、千早赤阪村教育委員会は平成3年5月から6月にかけて、開発予定地全面を対象に試掘調査を行なった。調査の結果、ほぼ全面に遺構・包含層の存在が認められ、事業主体である千早赤阪村企画部企画調整課と村教育委員会の二者は発掘調査に関する協議を重ね、8月から本調査を行なった。

第1次調査は、ホール建設予定地と南側サービス道路予定地、第2次調査は工事車両進入路及びホールに伴う電気・水道等配管部、公園予定地の北東側駐車場と資料館入口付近について調査を行なった。



第2図 調査区位置図(1/1,200)

第4章 調査の成果

第1節 基本層序

調査区は南北に走る丘陵の西側に位置する。調査区南側には東西に延びる丘陵から派生する陵があり、その間は南から北に向かって下る緩やかな沢状になっている。調査前には村立赤阪中学校や村営プールなどがあり、調査区南側は攪乱され、包含層がない部分が多い。包含層が良好に遺存したのは、村立郷土資料館入口付近の一部のみで、3面の遺構面を確認した。以下、村立郷土資料館入口付近を基本に各土層の特徴を記することにする。

第I層 暗青灰色土 旧耕土である。層厚約15cm。

第II層 黄灰色粘質土 床土である。層厚約5cm。

第III層 灰色土 第1面を覆う土層である。層厚約10cm。瓦器・土師器・須恵器・青磁・製塙土器などが出土する、中世の包含層である。遺物の中には縄文土器も出土している。

第IV層 茶褐色混じり灰色土 第2面を覆う土層である。上面はT.P + 140.80mを測る。層厚約15cm。瓦器・土師器・須恵器・青磁・製塙土器などが出土する、中世の包含層である。

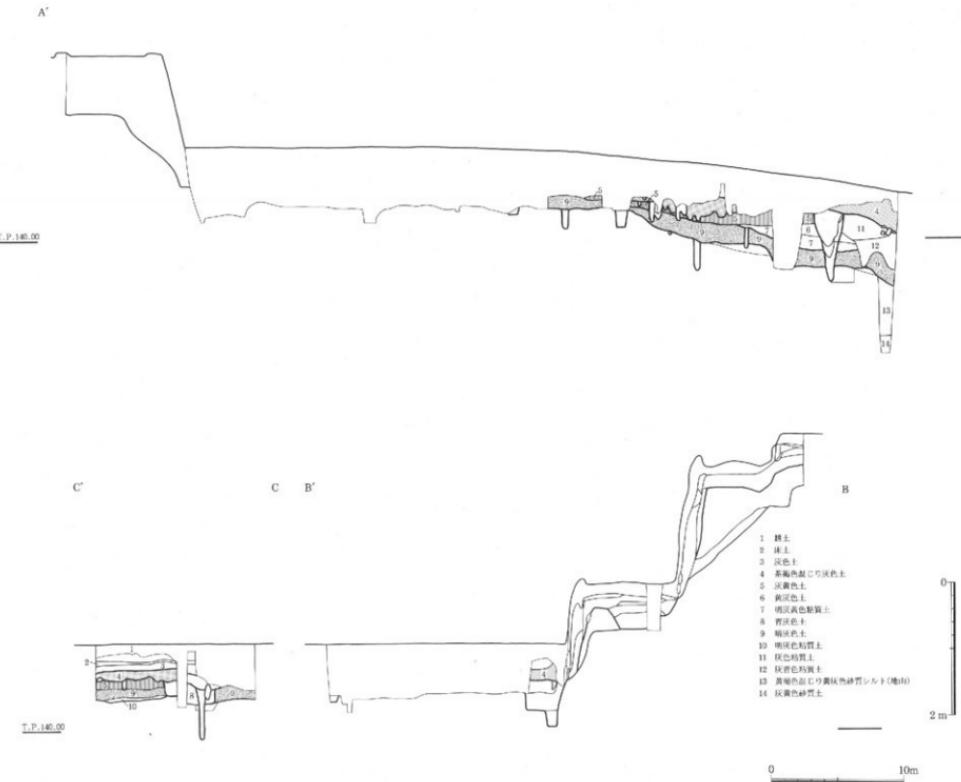
第V層 灰黄色土 層厚約5cm。

第VI層 暗灰色土 上面はT.P + 140.65mを測る。層厚約20cm。

第VII層 黄灰色粘土 地山である。調査区の中央、東西に走る疎混じりの黄灰色粘土で旧河道と考えられる。南西側は暗茶褐色粘土で、黒褐色土の不定形土壤が多く検出された。土壤からの遺物はなく、時期は不明である。

土層の堆積は、東西方向はほぼ水平に堆積しているが、南北方向は沢に沿って北に下り気味である。

地山を除くすべての層から中世の遺物が出土しており、沢の堆積は、中世の間にあったと考えられる。第IV～VI層については、明確ではないが遺跡の拡大に伴い人為的に造成された可能性もある。



第3図 土層断面図



第4図 遺構配置図(1/400)

第2節 遺構

1. 堀状遺構

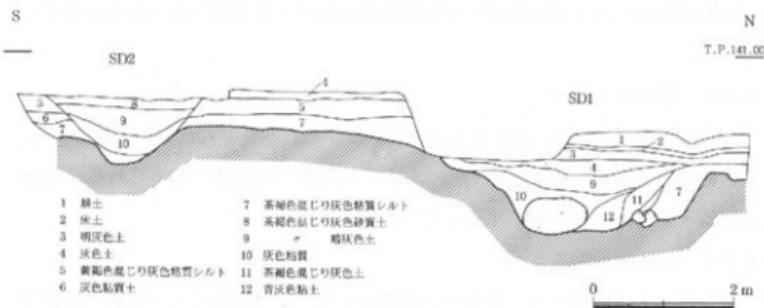
SD 1 (第4・5図、図版2)

SD 2の北側外に東西に走る堀である。長さ約17m、幅約3.15m、深さ約1mを測る。これもSD 2と同じように東西に走る現在の水路によって攪乱されている。堀の規模はSD 2より大きい。

遺物は瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器・青磁などが出土している。遺物には中世以前の遺物も多く含まれる。

SD 2 (第4・5図、図版2)

建物群を区画する濠である。調査区中央、平坦面と斜面を分ける位置に南北に走り、北端を西側に曲げ、その先端はやや西南に向く。長さ約60m、幅約2.2m、深さ9.3mを測る。遺構の上には南北に走る現在の水路があり、上面は攪乱されている。上層の暗茶褐色粘質土からは、とくに多くの白色系土師器皿が出土している。埋土は上層 暗茶褐色粘質土・中層 灰色砂質土・下層 褐色混じり灰青色粘土に分層できたが、遺物からは大きな時期差がみられなかつた。また、埋土の状況から、水が溜まっていたと考えられる。SD 2に付随する遺構に、土橋状の遺構SV 1・2がある。遺物は瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器・古瀬戸・天目茶碗・青磁などが出土している。



第5図 SD 1・2断面図(1/80)

S A 1 (第4図)

S D 1 と S D 2 の間に位置する。S D 1 と S D 2 の間には遺構が無く、盛り土は残っていないが土壘があったと考えられる。瓦器椀、土師器羽釜が出土している。

S D 3 (第6図、図版4)

調査区北側東端に位置する。S D 2 の西南側先端から2.4m間をあけ、S V 1 を挟んだ西側に位置する。S D 2 に対応すると思われる溝である。長さ約3.5m、幅約2.2m、深さ1mを測った。遺物は瓦器・土師器・須恵器・青磁・常滑・備前・製塩土器が出土している。遺構の時期は、S D 1 と同時期の遺構と考えられる。

S V 1 (第6図、図版3)

S D 2 の北側先端とS D 3 の間は、堀で囲まれた建物群の入口と考えられる。調査区の北西端の旧地形は西側に向って落ち込んでおり、落ち込みが埋められた後、遺構の肩にあたる部分に石を埋め込み、土橋状の遺構として造られたものである。幅2.4mを測る。遺構周辺には石が多く、石敷きの遺構であったと思われる。そして、遺構北側の延長には石組の暗渠S D 7 や石敷きの遺構S S 1 がある。

S D 4 (第6図、図版4・5)

調査区の西北側に位置する。白色系の土師器皿を中心に一括投棄した遺構である。幅1.6m、深さ0.9mを測る。S D 4 周辺は大きく攪乱されている。

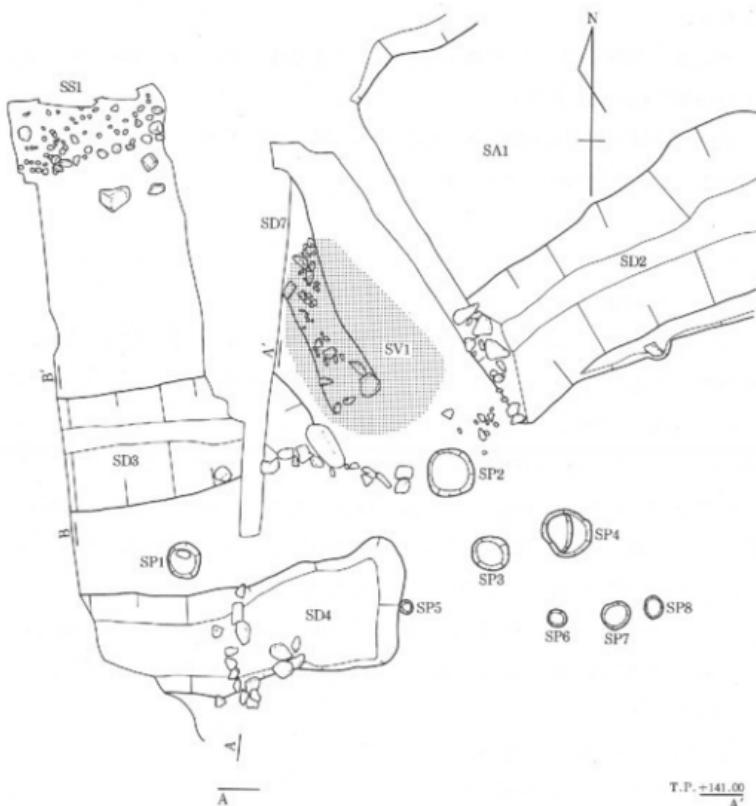
遺物は瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器・天目茶椀・硯・漆片が出土している。

S D 7 (第6図)

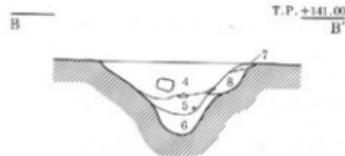
S D 2 と S D 3 の間、S V 1 の北側に位置する。石を使った暗渠の溝である。長さ約3m、幅約0.4mを測った。S V 1 と関連する遺構と考えられる。遺物は瓦器・土師器・須恵器が出土している。

S V 2 (第4図、図版5)

調査区中央に位置する。S D 2 の遺構の中を一部分掘残した土橋状の遺構である。幅約3.5m、高さ0.34mを測った。



- 1 茶褐色粘土
- 2 黒色洪積じり灰色砂質土
- 3 灰色砂質土
- 4 茶褐色疊じり灰色砂質土
- 5 " 粘状灰土
- 6 灰色粘土
- 7 灰色砂質土
- 8 明灰色粘土質土



第6図 SV1周辺構造配置図(1/80)

S D 6

S D 2 の東側の一段上に位置する、南北に走る浅い溝である。長さ50m、幅4m、深さ約0.25mを測る。

遺物は瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器・青磁が出土している。遺物には中世以前の遺物が多く含まれる。

2. 建物遺構

S B 1 (第8図、図版6)

調査区の北側、S D 2 が南北方向から東西方向にカーブ付近に位置する掘立柱建物である。主軸はW-00°40'-Sを示す。桁行3間×梁行2間(7.5m×4.8m)の総柱の建物で、西側には庇が設けられている。建物の周辺には、地鎮のためと思われる土器埋納ピット S P26、S P28、S P41がある。

S P26は、S B 1 の南西角に位置しており、柱穴の掘方は梢円形で径約56cm、深さ35cmを測った。S P28(第7図1、図版11)はS B 1 の南西角に位置しており、柱穴の掘方は梢円形で径約50cm、深さ31cmを測った。

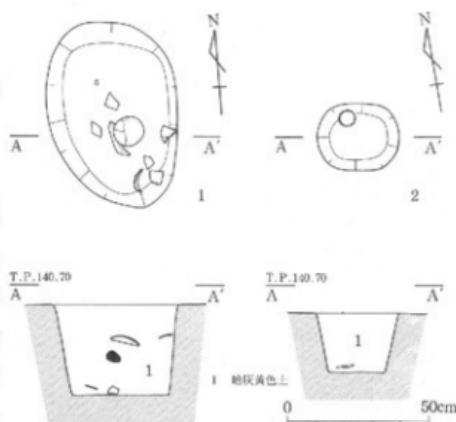
S P41(第7図2、図版11)はS B 1 の西側に位置しており、柱穴の掘方は梢円形で径約28cm、深さ21cmを測った。柱穴の底から土師器皿が口縁を上にして出土している。

遺物は瓦器・白色系土師器、土師器・須恵器・天目茶碗・青磁が出土している。

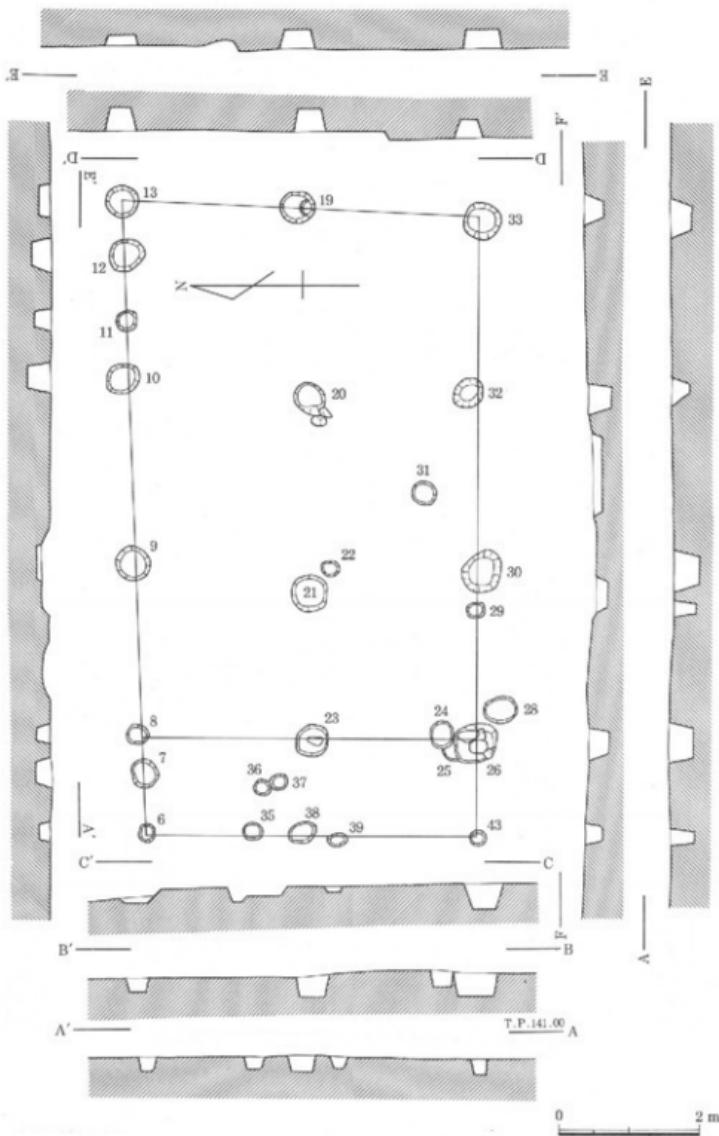
S B 2 (第9図、図版6)

調査区西側中央に位置する基礎に石組を使用した建物である。

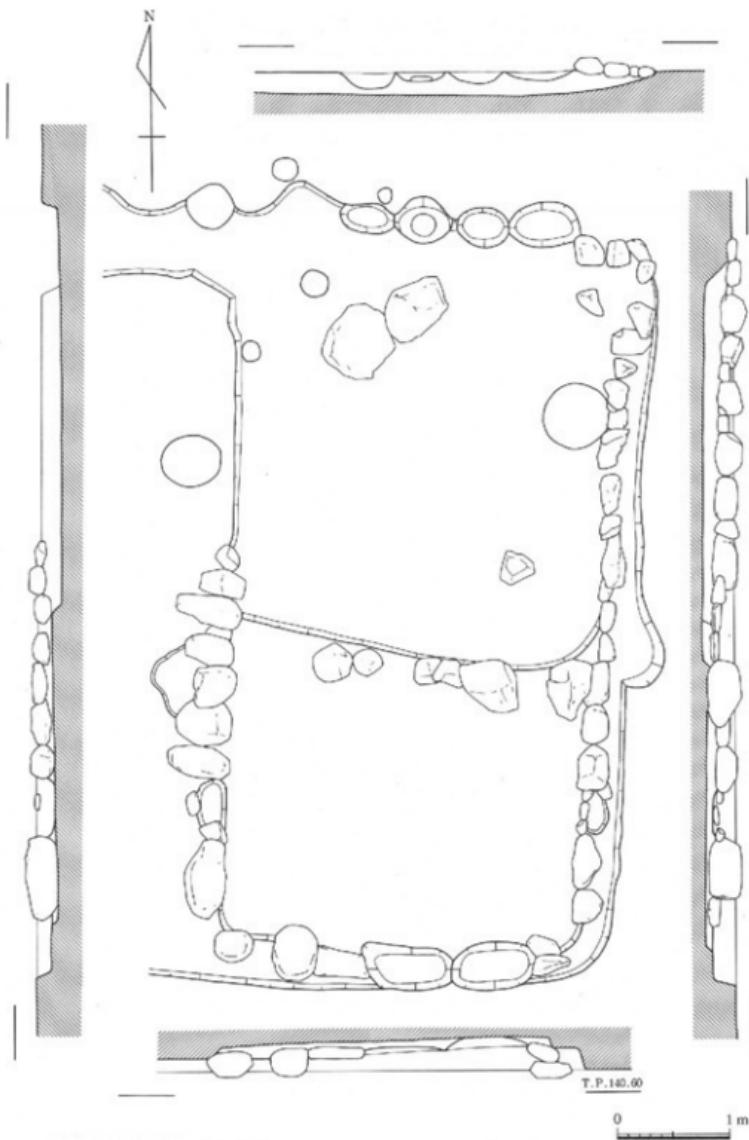
主軸はN-05°-Eを示す。南北約7m×東西3.7mで、建物内側を竪穴建物のように掘り下げており、深さ21.6~31.0cmを測る。建物の内側は、空間を2



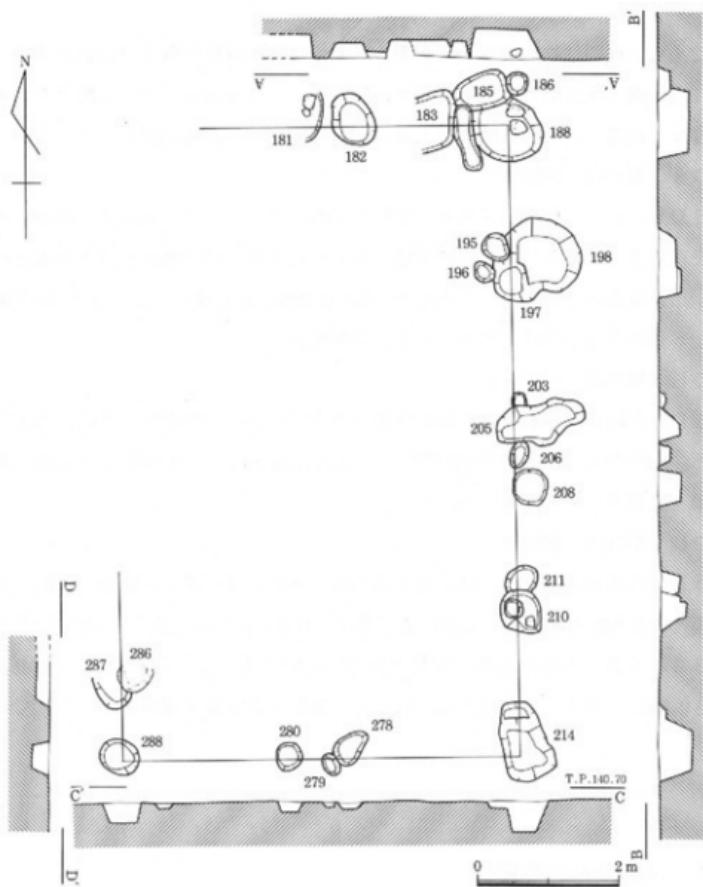
第7図 S P28・41遺物出土状況図(1/20)



第8図 SB 1 平面図・断面図(1/80)



第9図 SB 2 平面図・断面図(1/50)



第10図 SB 3 平面図・断面図(1/80)

つに区切っている。建物の周囲には S D13が巡る。西側には、石組の溝 S D12がある。S B 2・S D12の埋土は、土器がぎっしりと詰まった状態で検出している。また、その中には多くの焼土が含まれており、焼失したと考えられる。遺物は瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器などが大量に出土している。

S B 3 (第10図、図版 7)

調査区の西側中央に位置する掘立柱建物である。建物の大半は調査区外に延びる。主軸は N-02°-E を示す。桁行 4間×梁行 2間 (9.0m × 5.7m) の建

物である。柱間は約2.2~2.6mを測る。東側には、石組の溝S D12がある。

柱穴の掘方は方形と円形で径60cm、深さ23~33cmを測る。埋土は焼土で、遺物は多く瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器・天目茶碗が出土している。

S D 9 (第11図、図版9)

S D 9、10、11、12はS B 3の北側を東西に平行してはしる溝で、建物の周囲を巡る溝と考えられる。建物が建て替えられる度に付け替えられたと考えられ、出土遺物には時期差がみられた。幅約2.2m、最も深いところで0.3mを測る。S D 9の下からは、さらに2条の溝を検出した。

S D 11 (第11図、図版9)

S D 9と同じくS B 3の北側に位置する溝で、建物の周囲を巡る溝と考えられる。幅0.6m、深さ0.19mを測る。遺物は瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器・古瀬戸が出土している。

S D 12 (第11図、図版9)

S B 3の北側を平行してはしる4本の溝のうち南側の溝で、建物の周囲を巡る溝と考えられる。北側で東西に走る溝は、S B 3に沿って南北方向に曲がり、S B 2とS B 3の間を走る。南北方向では石組の溝になっている。幅1.2m、深さ0.32mを測る。遺物は瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器が出土している。

3. 土壌

S K 1 (第12図、図版10)

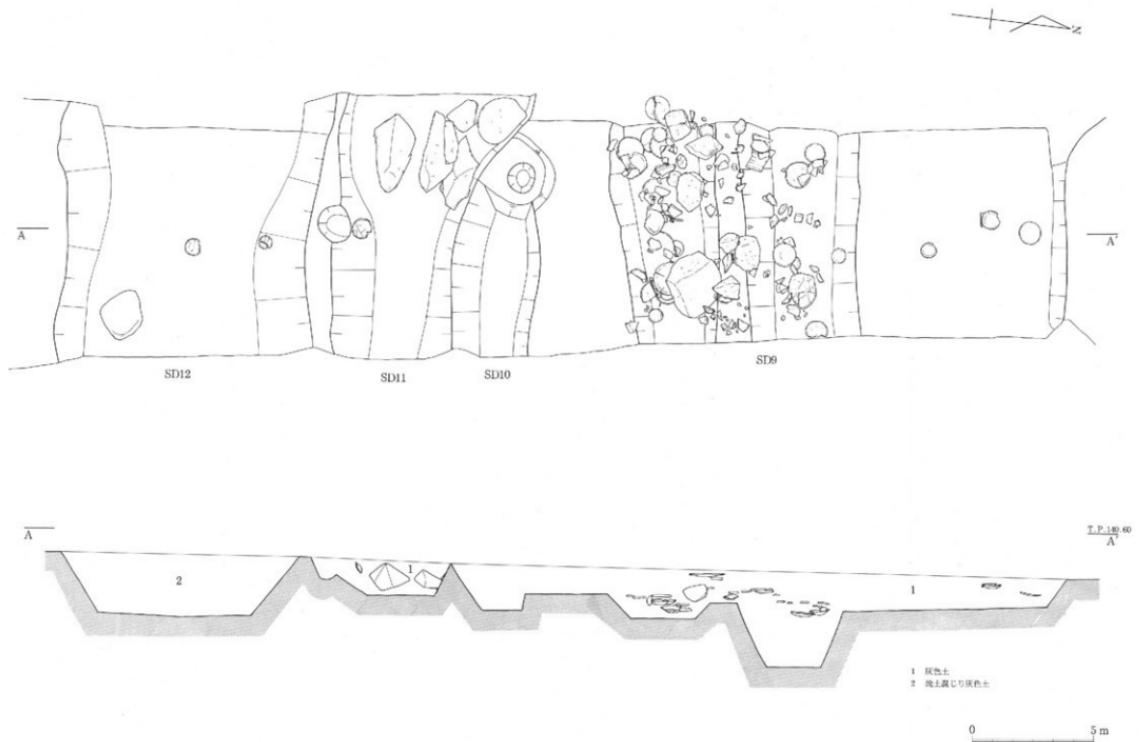
調査区中央に位置する。遺構内からは多数の遺物が出土している。径1.9m、深さ0.58mを測る。遺物は瓦器・土師器皿・羽釜が出土している。

S K 2 (第13図)

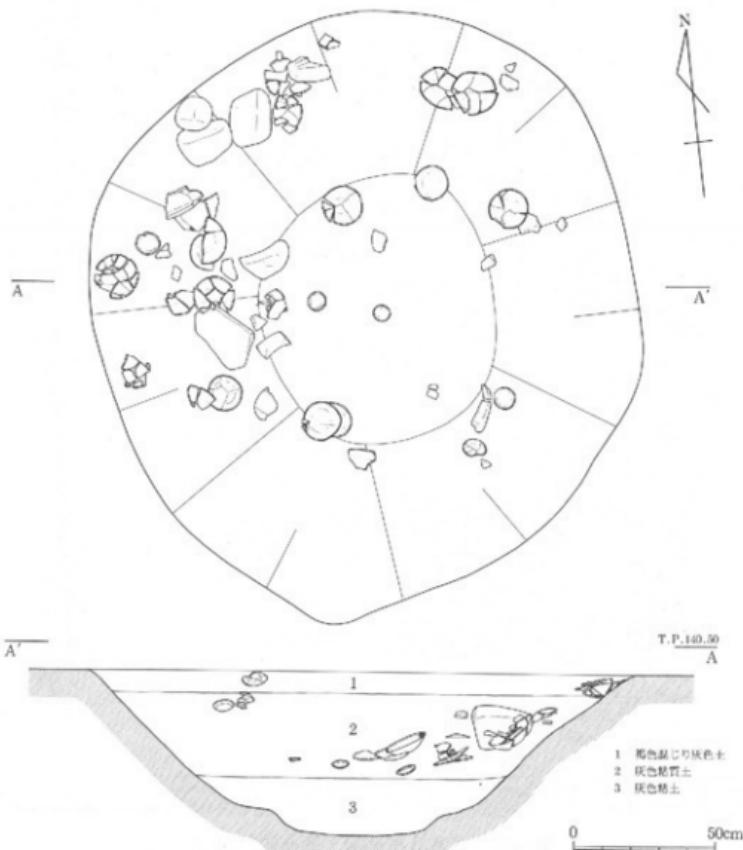
調査区中央でS D 2とS B 2の間に位置する台形状の遺構である。長辺1.14m、短辺0.92m、深さ0.38mを測る。灰黒色粘質シルトの埋土から縄文土器が出土している。遺構の時期は、遺物から縄文後期と考えられる。

S K 3 (第14図、図版10)

調査区中央南側、S D 2と平行にある石敷の遺構である。方形状の遺構で長



第11図 SD 9・11・12遺物出土状況図(1/20)

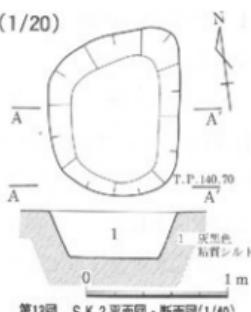


第12図 SK 1 遺物出土状況図(1/20)

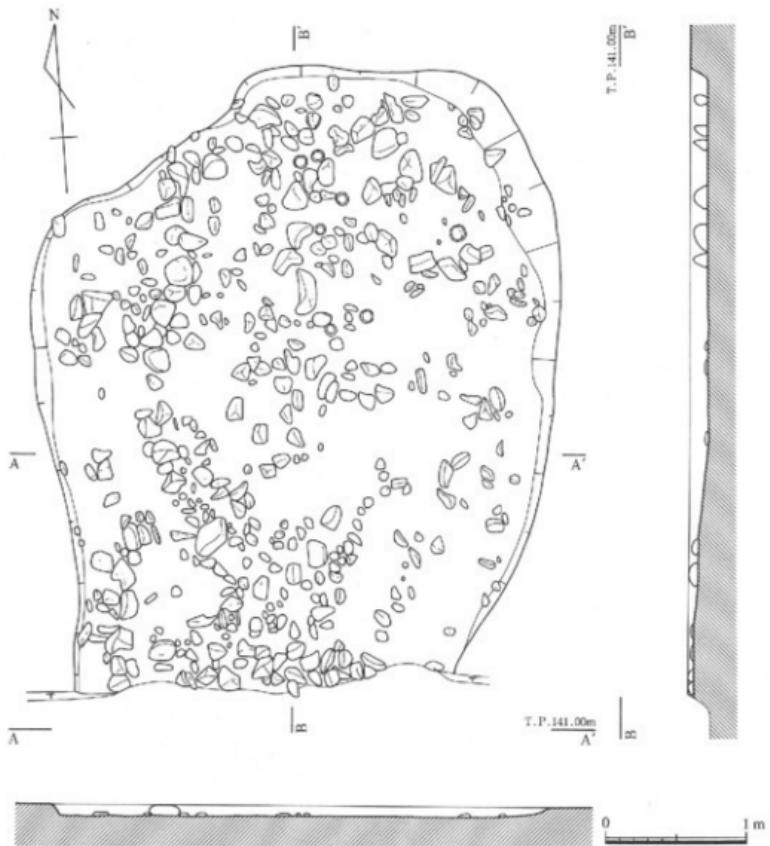
さ4.5m、幅3.65m、深さ0.21mを測る。遺物は瓦器、土師器が出土している。

S K 4

調査区中央西側の拡張部に位置する。遺構は北側調査区外に延びる。遺構付近は攪乱されており、遺構を明確に検出できなかった。遺物は瓦器・土師器などが多く出土している。



第13図 SK 2 平面図・断面図(1/40)



第14図 SK 3 平面図・断面図(1/40)

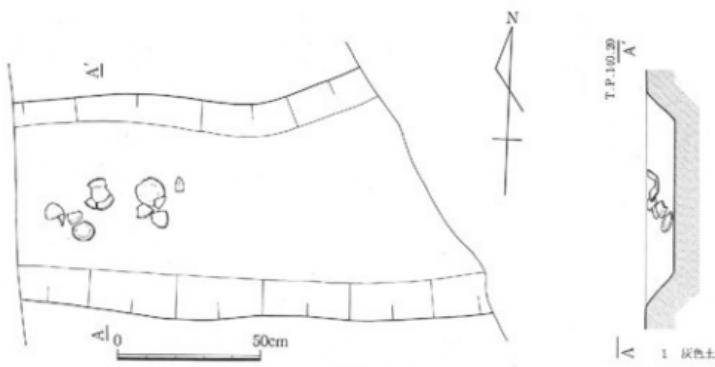
4. その他の遺構

SD 5

SB 1 の北側に位置する、東西方向の溝である。SD 2 を切って検出され、長さ約10.8m、幅約0.9~1.1m、深さ0.29mを測った。遺物は瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器・瓦器・常滑・備前・製塙土器が出土した。

SD 8 (第15図)

調査区北西側SD 4 とSD 9 の間に位置する。幅約0.76m、深さ0.1mを測った。遺物は瓦器・土師器・国産陶磁器・鉄製品が出土している。



第15図 SD 8 遺物出土状況図(1/20)

S P 1

SD 4 の北側、SD 3 との間に位置する。柱穴の掘方は円形で径約50cm、深さ25cmを測った。埋土は灰色土で、遺物は瓦器・土師器が出土している。

S P 2

SV 1 の南側に位置する。柱穴の掘方は円形で径約70cm、深さ24cmを測った。埋土は暗茶褐色土で、遺物は瓦器・土師器・須恵器が出土している。

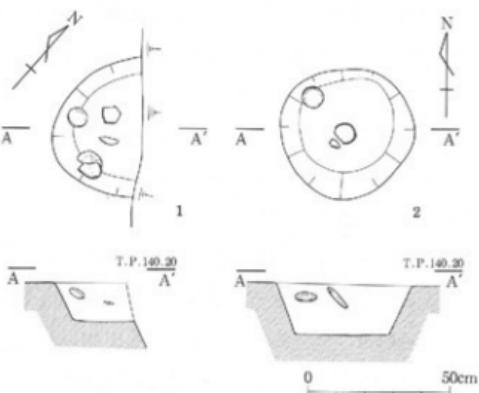
S P 3

SP 2 の南側に位置する。柱穴の掘方は円形で径約50cm、深さ25cmを測った。埋土は暗茶褐色土で、遺物は瓦器・土師器・須恵器が出土した。

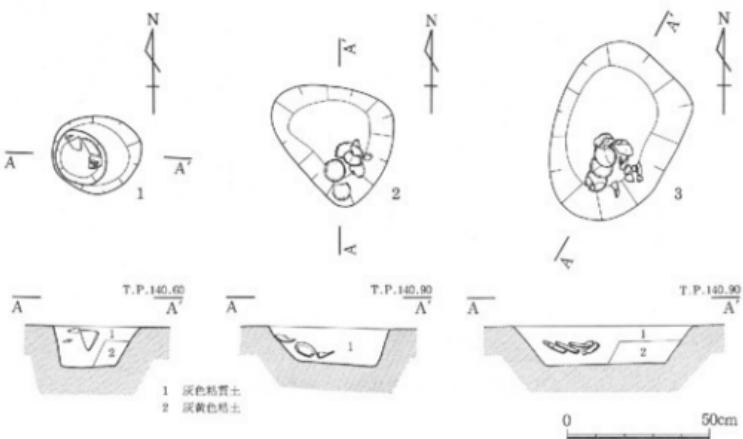
SP 45 (第16図 1、図版11) A-A'

調査区北西側 SD 8 の南側に位置する。遺構の東半分は攪乱されている。柱穴の掘方は円形と思われ径約50cm、深さ14cmを測った。

埋土は灰色土で瓦器・土師器が出土している。



第16図 SP 45・46 遺物出土状況図(1/20)



第17図 S P 471・476・477遺物出土状況図(1/20)

S P 46 (第16図2、図版11)

調査区北西側 S D 8 の南側に位置する。柱穴の掘方は円形で径約47cm、深さ21cmを測った。埋土は灰色土で、瓦器・土師器が出土している。

S P 470 (図版11)

S P 476の北西側に位置する。北側半分が攪乱されている。径約15cm、深さ26cmを測った。遺物は土師器が出土している。

S P 471 (第17図1、図版11)

S P 470の北側に位置する。上面は攪乱されており、遺構は浅い。柱穴の掘方は円形で径約31cm、深さ15cmを測った。遺物は瓦器・土師器が出土している。

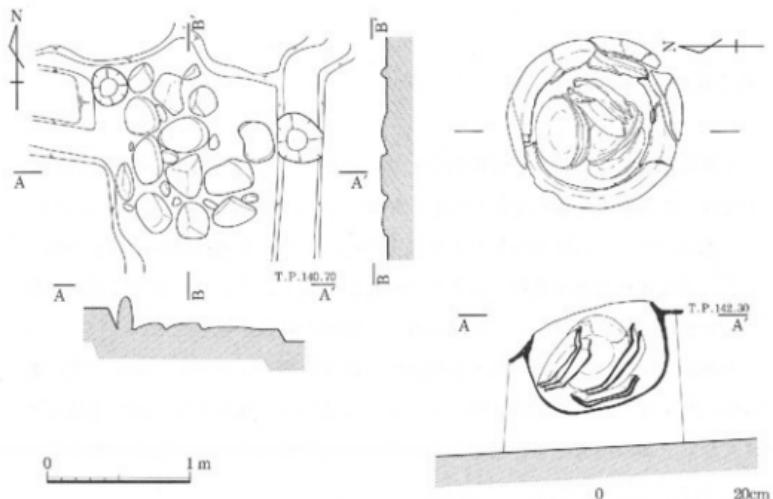
S P 476 (第17図2、図版11)

調査区西南側に位置する。柱穴の掘方は梢円形で径約38cm、深さ12cmを測った。4個体の土師器皿の口縁を上にした状態で納めた土器埋納ピットである。

S P 477 (第17図3、図版11)

S P 476の西側に位置する。土器埋納ピットである。3個体の土師器皿の口縁を上にし、重ねるように納めた土器埋納ピットである。柱穴の掘方は梢円形で長径約64cm、短径約43cm、深さ14cmを測った。遺物は土師器が出土している。

S P 470・476・477から出土の土師器皿は酷似しており、ほぼ同時代の遺構と考えられる。



第18図 SS 2 平面図・断面図(1/40) 第19図 SX 1 遺物出土状況図(1/20)

SS 2 (第18図、図版8)

S P 476の東側に位置する中型の石を13個使用した石敷きの遺構である。径30cm～40cmの石を使用しており、中型の石の間には小さな石をはさみ込んでいる。遺構からの出土遺物はなく、遺構の性格は不明である。

SS 3 (図版8)

S D 2とS D 6の間に位置する。長辺10.3m、短辺5.7mの不定形の遺構である。拳大の河原石を使用した石敷きの遺構で、SK 3と同じように石を敷きつめる。遺構の性格はSV 2の付近にあり、高低差のあるSD 2とSD 6の間にあることから、外部からSD 2の内部に繋がるSV 2に関連する遺構とも考えられる。遺物は瓦器・白色系土師器・土師器・須恵器・常滑・備前・古瀬戸・鉄製品などが出土している。

S X 1 (第19図、図版12)

調査区南側、東西にのびる舌状の丘陵で検出した。地鎮にともなう遺構と考えられる。瓦質羽釜の内部に、土師器皿2～3枚を一単位とし、15枚納入されていた。羽釜の外面は2次焼成を受けていない。

第3節 遺物

本遺跡の中世の遺物は、比較的まとまったかたちで出土した。遺物は瓦器・土師器・東播系須恵器・備前・常滑・古瀬戸など日用雑器が主に出上している。

瓦器椀については尾上編年をもとに分類を行った。瓦器椀は尾上編年のIII-3から瓦器椀が消滅するIV-5までが主に出上している。IV-3では高台を伴うものや暗文を施さないものがあるなど、地域の特色が見られる。

土師器の皿については、胎土が精緻で口縁部に横ナデを施し、体部下に強い指圧痕を残す白色系土師器皿が多く出土している。体部下に強い指圧痕を残さない土師器小皿にも、同じように色調が白色系のものもあるが、胎土が粗いものはここでは白色系としない。

S A 1 (第20図 1~6)

瓦器 1・2は椀である。口径13.6cm、器高3.1cmを測る。尾上編年IV-1。2は上面の出土で口径11.6cm、器高2.4cmを測る。3は羽釜である。

土師器 5・6は小皿である。口径8.0cm~8.2cm、器高1.2cm~1.4cmを測る。上面の出土である。

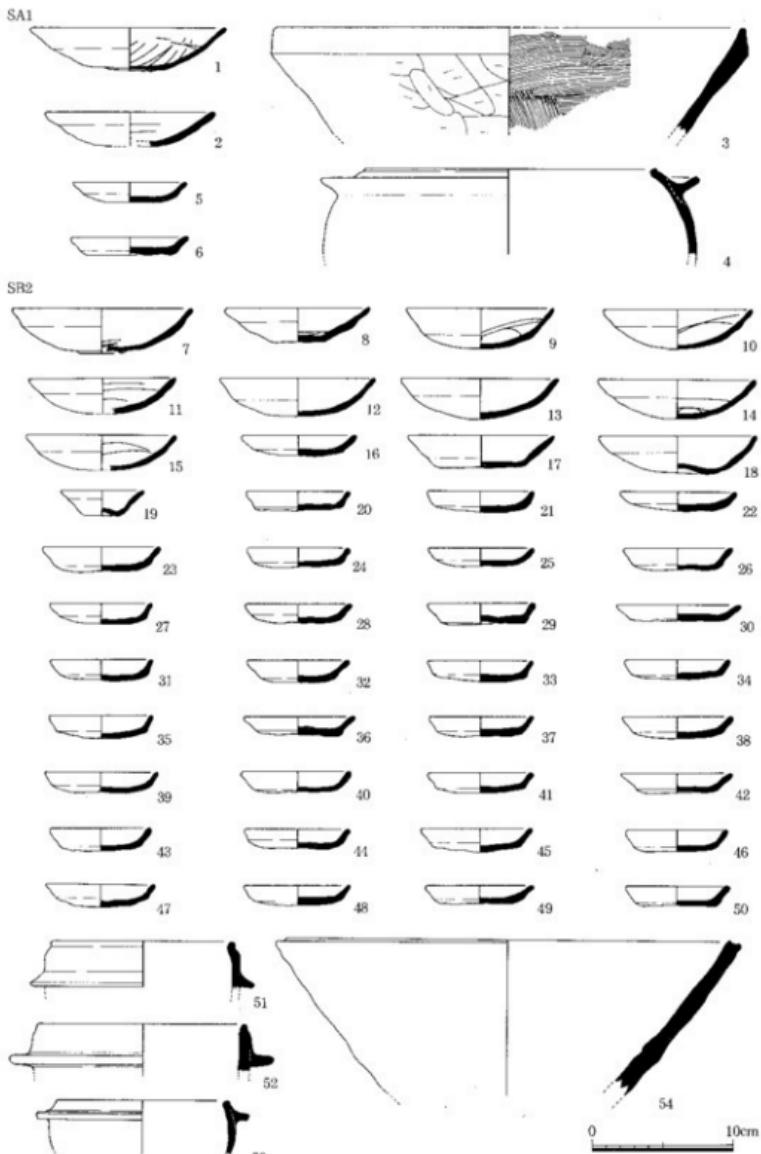
S B 2 (第20・21図 7~56)

瓦器 7~15は椀である。口径10.0cm~12.6cm、器高2.4cm~3.7cmを測る。尾上編年IV-4・5。16は小皿である。51は羽釜である。

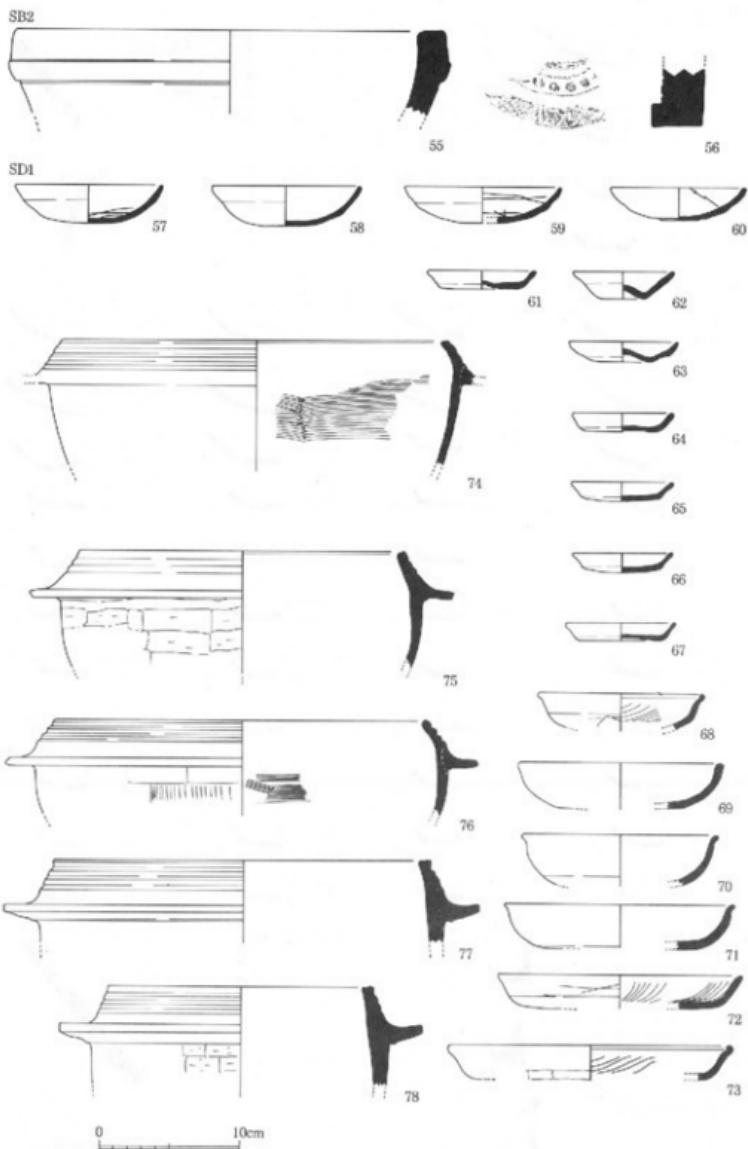
土師器 17・18は中皿である。20~50は小皿である。口径7.8cm~8.0cm、器高1.3cm~1.8cmを測る。19は白色系のヘソ皿である。口径5.8cm、器高1.8cmを測る。52・53は羽釜である。53は小型ではあるがていねいなつくりである。口径12.0cmを測る。

国産陶磁器 54は常滑の鉢である。口径31.4cmを測る。口縁端部に沈線を施す。

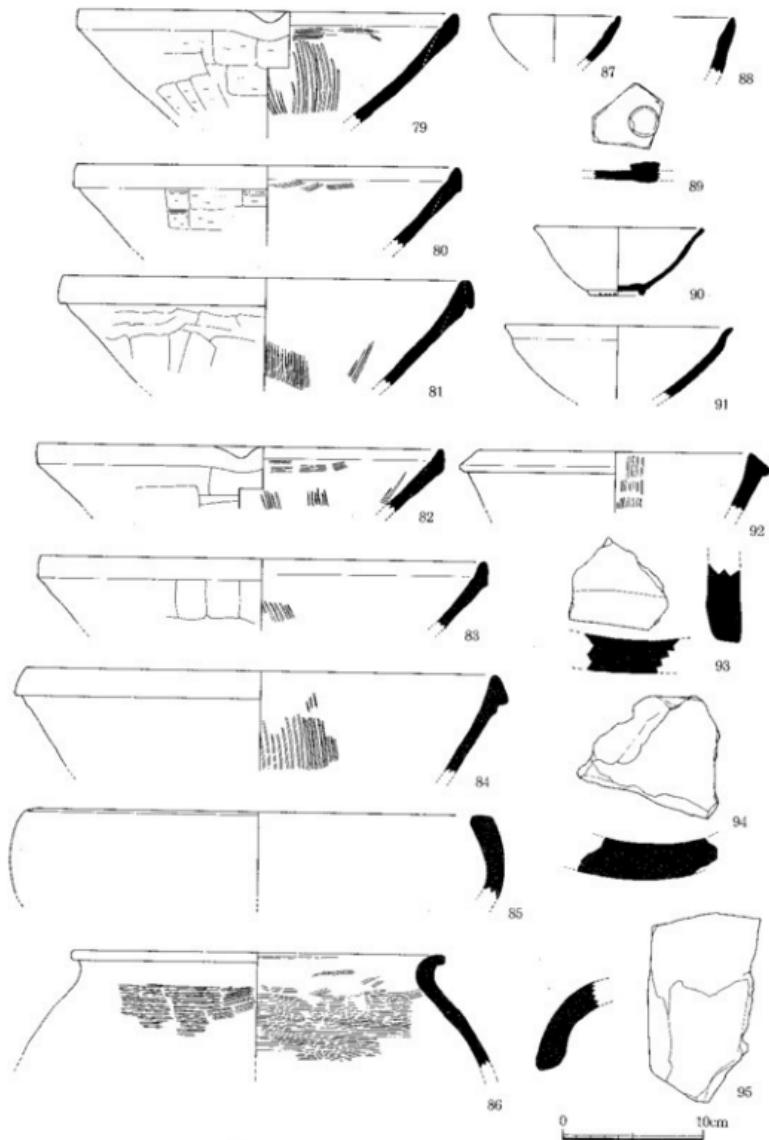
滑石製品 55は石鍋である。口径30.0cmを測る。口縁は直立する。摩滅がはげしく鉗の断面は明確ではないが、先端を下方に垂下していると思われる。体部下半にも削り痕は見られない。転用されている。



第20図 S A 1・S B 2(1)出土遺物(1/4)



第21図 SB2(2)・SD1(1)出土遺物(1/4)



第22図 SD 1 (2)出土遺物(1/4)

瓦 56は瓦質の軒丸瓦である。外縁厚1.6cm、外縁高0.8cm、瓦当厚3.6cm、を測る。珠文帯の内外に圈線がある。

S D 1 (第21・22図57~95)

瓦器 57~60は椀である。口径は9.6cm~10.8cm、器高は2.3cm~2.8cmを測る。57・58はやや深い。61は小皿である。74~78は羽釜である。口縁部が内湾するもの、丸いもの、端部に面をもつものがある。79~84は摺鉢である。85は火鉢、86は甕である。

土師器 63~67は小皿である。口径は6.9cm~7.6cm、器高は1.3cm~1.4cmを測る。63は白色系土師器と同じ形態の小皿である。しかし、他の白色系土師器より器高が低く、新しいと思われる。68~73は奈良時代の遺物である。

須恵器 89は杯蓋の宝珠形のつまみである。90は須恵質の椀である。口径11.7cm、器高4.9cmを測る。口縁は外反し、底部に貼り付け高台を施す。高台内面には糸切痕、高台には端部にはモミガラ圧痕を残す。東海地方からの搬入品であろう。

国産陶磁器 91は古瀬戸の平椀、92は備前摺鉢である。91は口径16.0cmで口縁端部を外反させるもので、時期は14世紀ごろと考えられる。

製塩土器 87~88は製塩土器である。

瓦 93は須恵質の平瓦、94・95は瓦質の平瓦・丸瓦である。

S D 2 上層 (第23図96~111)

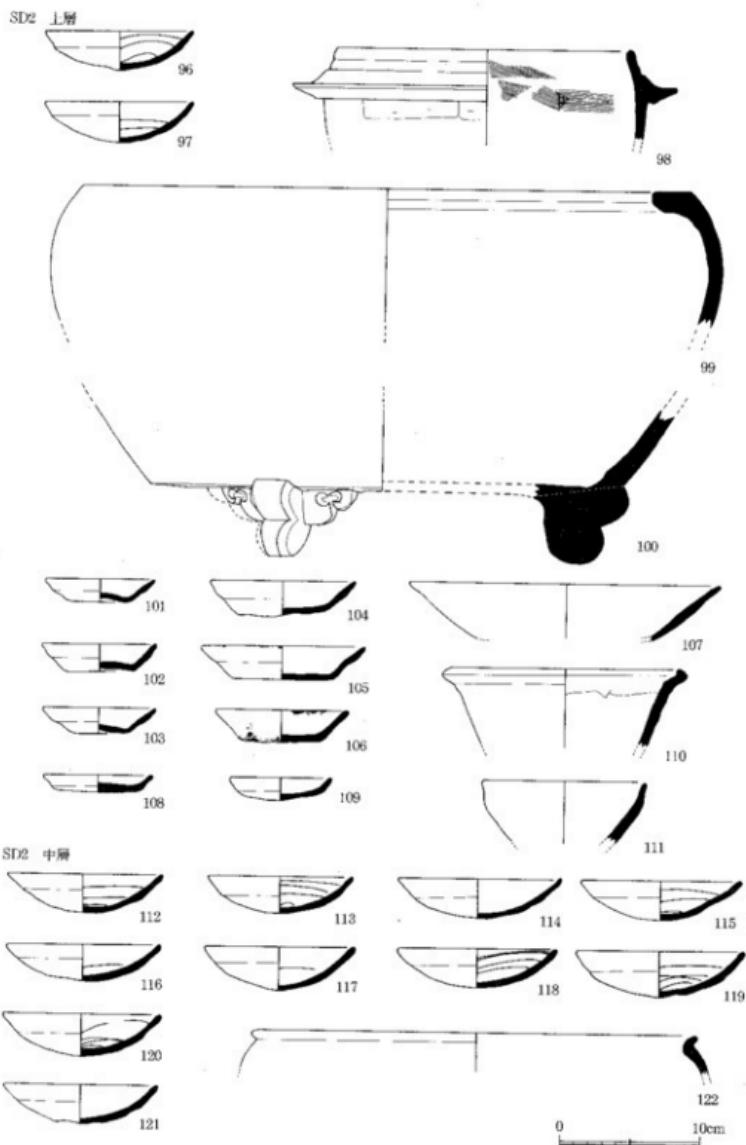
瓦器 96・97は椀である。口径は10.4cm、器高は2.8cm~2.9cmを測る。98は羽釜である。口径は20.8cmを測る。口縁に弱い段を付ける。99は火鉢である。口径43.2cmを測る。100は底部で、三足のねこ足を伴った火鉢である。

土師器 101~105・107は白色系の皿である。105・106は灯明皿である。108~109は小皿で口径7.1cm~7.5cm、器高1.6cm~1.8cmを測る。

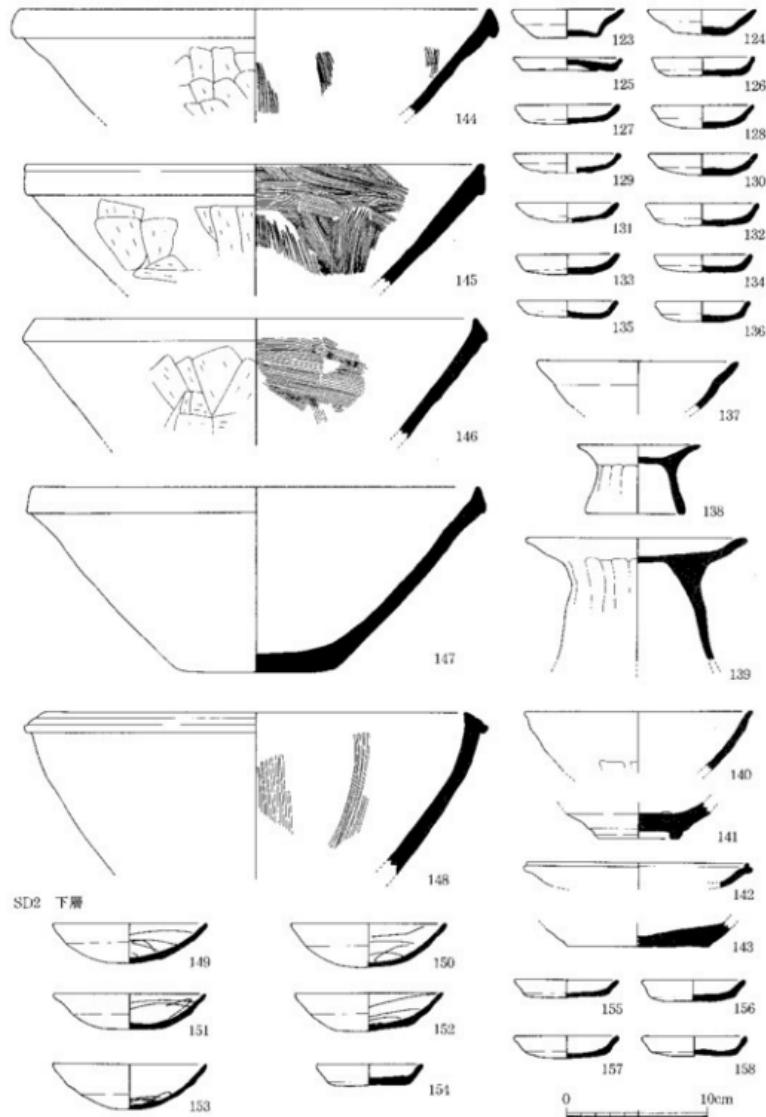
国産陶磁器 110は古瀬戸の柄付片口鉢と考えられる。111は天目茶碗である。口径は11.8cmを測る。

S D 2 中層 (第23・24図112~148)

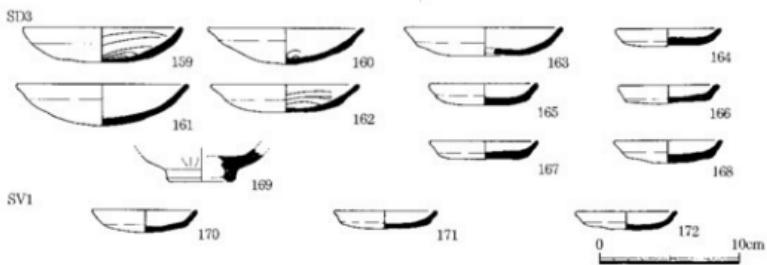
瓦器 112~121は椀で口径10.2cm~11.6cm、器高2.6cm~3.3cmを測る。144~145は摺鉢で口径31cm~33cmを測る。122は羽釜で口縁端部を小さく外反する。



第23図 SD 2 (1)出土遺物(1/4)



第24図 SD2(2)出土遺物(1/4)



第25図 SD3・SV1出土遺物(1/4)

土師器 123・124は白色系の小皿である。125～136は小皿で口径6.8cm～7.6cm、器高0.9cm～1.6cmを測る。138・139は台付皿である。138は口径8.5cm、器高4.9cm、139は口径15.4cmを測る。146は摺鉢である。

須恵器 147は東播系の練鉢である。口径は31.8cm、器高は10.9cmを測る。

国産陶磁器 148は備前摺鉢である。口径は29.6cmを測る。140～143は古瀬戸である。140・141は平椀、142は卸皿、143は鉢の底部と思われる。

SD2下層（第24図149～158）

瓦器 149～153は椀である。口径10.4cm～10.8cm、器高2.3cm～2.5cmを測る。153は器壁が薄く尖底ぎみである。

土師器 154～158は小皿である。口径は7.2cm～7.4cm、器高は1.3cm～1.6cmを測る。

上層・中層・下層で明確な時期差はなかった。各層とも白色系の土師器皿を含んでおり、瓦器椀はIV-3・4で、IV-4が中心に出土している。

SD3（第25図159～169）

瓦器 159～162は椀である。口径は10.4cm～12.0cm、器高は2.0cm～3.0cmを測る。尾上編年IV-4。

土師器 163は中皿、164～168は小皿である。小皿は口径7.1cm～7.6cm、器高は1.2cm～1.6cmを測る。

輸入陶磁器 169は青磁の椀である。体部外面に蓮弁模様を施す。龍泉系で横田・森田編年I-5と考えられる。

SV1上面（第25図170～172）

土師器 170～172は小皿である。口径7.0cm～7.1cm、器高1.2cm～1.6cmを測

る。かなりの小皿である。

S D 4 上層 (第26~30図173~379)

瓦器 173~179は椀である。口径10.7cm~11.8cm、器高2.7cm~3.1cmを測る。高台を持つものとないものがある。尾上編年IV-3・4。

370~373は摺鉢である。375・376は火鉢である。377~379は羽釜である。379は大型の羽釜で口径31.4cmを測る。胎土・焼成とともに良く、体部外面は全面ヘラ削りで、内面はナデである。河内型と思われる。復元すると3~最大5升炊用の羽釜と考えられる。

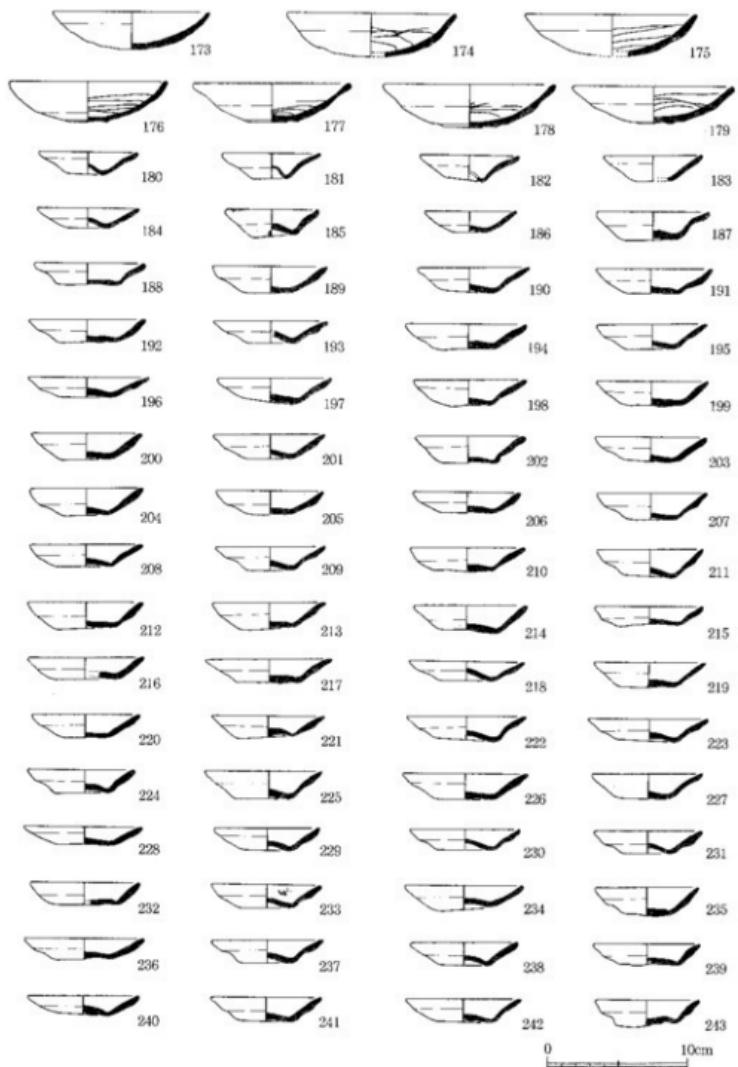
土師器 京都系の皿は白色系が中心で、その他に亜白色系・褐色系がある。180~186はヘソ皿である。口径6.5cm~7.0cm、器高1.6cm~1.9cmを測る。187~258は小皿である。口径7.2cm~8.8cm、器高1.2cm~2.4cmを測る。259~268は胎土・焼成・色調とも同じで、口縁は外上方に開き、体部下半に指圧痕がなく底部が厚いものである。267は口縁端部を端反碗のように外反する。268は平底の底部から外上方にまっすぐ開いている。269~272は亜白色系の小皿である。

中皿は法量や色調の違いで6種類に分類できる。273~312は白色系の中皿である。口径は9.8cm~11.1cm、器高は1.5cm~2.5cmを測る。中皿も小皿と同じように体部下半に指圧痕を残すものと残さないものがある。313~317は亜白色系の中皿で口径9.9cm~11.2cm、器高2.0cm~2.4cmを測る。胎土・焼成・器形とも同じであるが色調が異なる。318・319は赤褐色系の中皿で口径9.7cm、器高1.8cm~2.0cmを測る。器形は同じであるが胎土がやや粗い。324~326は厚手の中皿である。胎土は良いが白色系ほど細かくない。色調はにぶい橙黄色である。底部は平底である。325・326は底部に板目痕を残す。

320~323はやや小さめの大皿である。口径12.1cm~14.1cm、器高2.7cm~3.2cmを測る。法量は大皿と中皿の間の大きさにある。白色系のみである。口縁は外上方に開き、体部下半には指圧痕がなく底部は薄い。

327~332は大皿である。口径16.4cm~20.6cm、器高3.0cm~4.0cmを測る。白色系のみで口縁は外上方に開き、体部下半に指圧痕がなく底部は薄い。

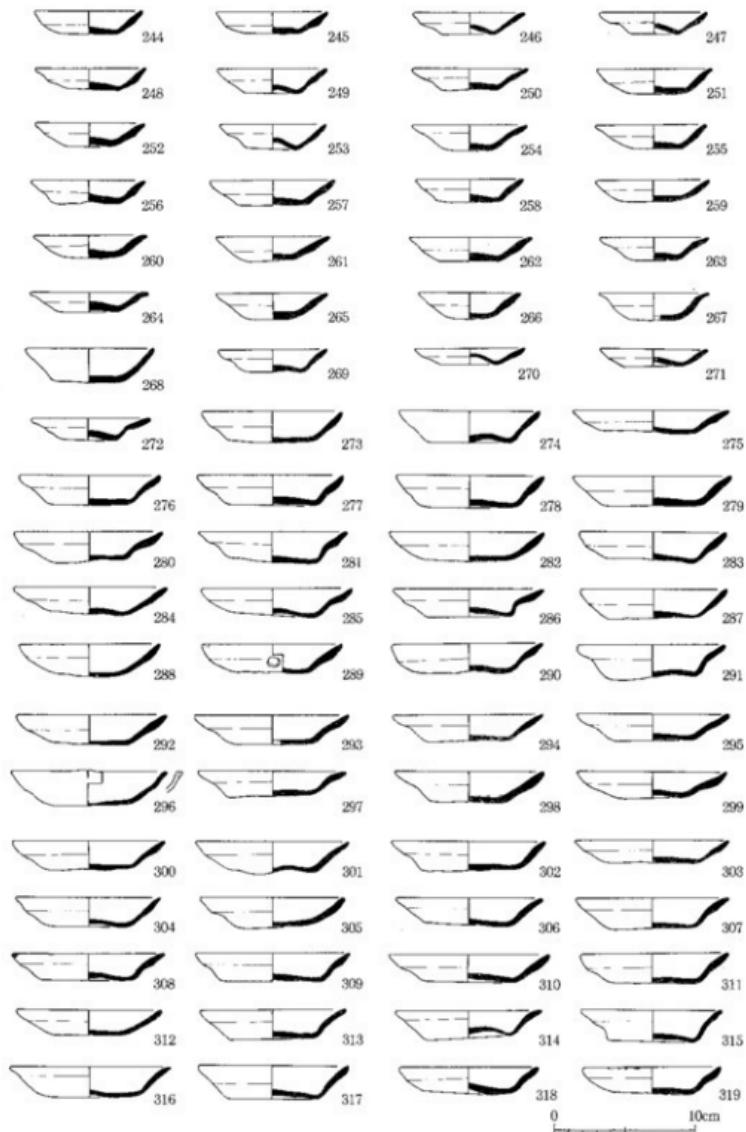
333~336は特大皿である。口径23.5cm~26.0cm、器高4.8cm~5.0cmを測る。



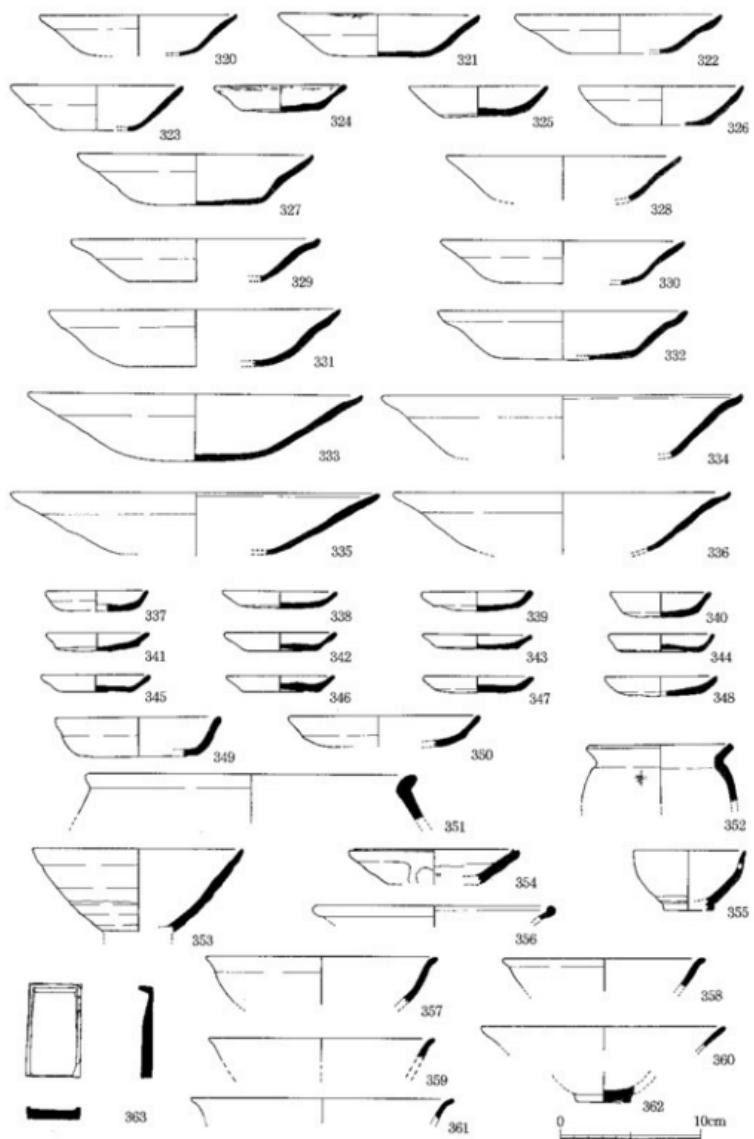
第26図 SD 4 (1)出土遺物(1/4)

白色系のみで器形は大皿と同じである。出土点数は少ない。

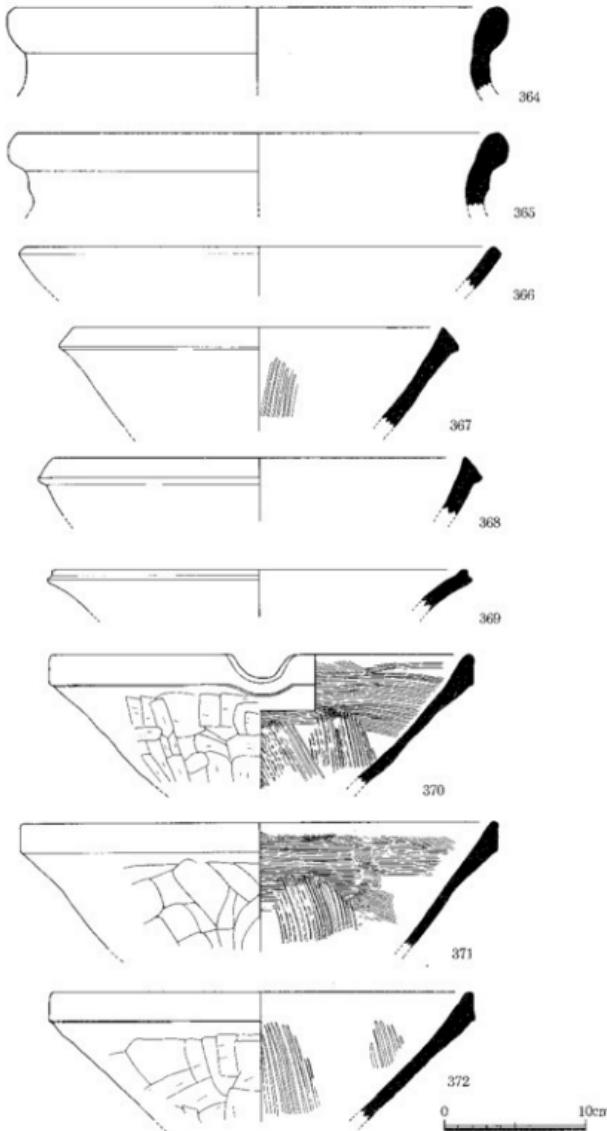
337~348は小皿で口径6.9cm~8.0cm、器高1.0cm~1.8cmを測る。351は羽釜



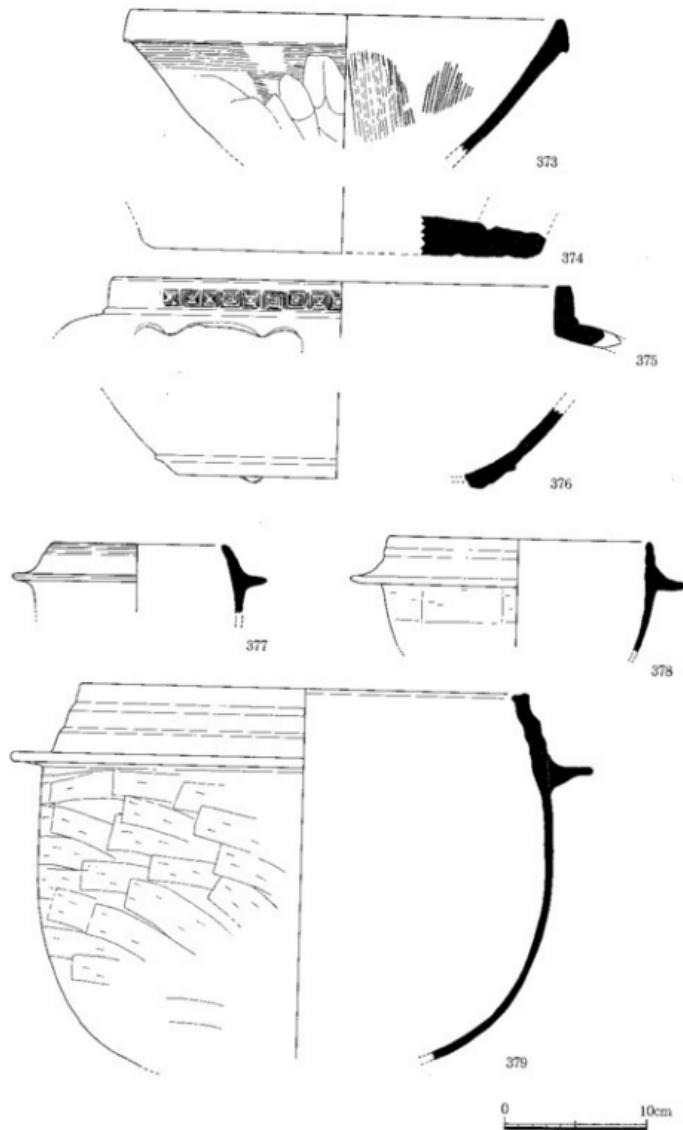
第27図 S D 4 (2)出土遺物(1/4)



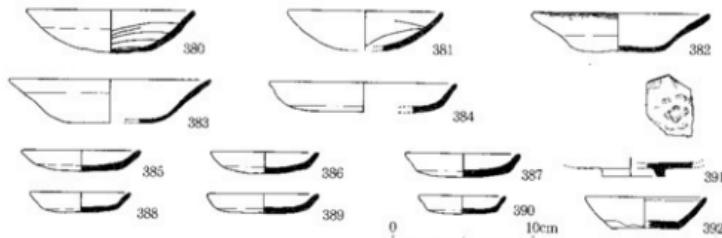
第28図 SD 4(3)出土遺物(1/4)



第29図 SD 4 (4)出土遺物(1/4)



第30図 SD 4 (5)出土遺物(1/4)



第31図 SD 4 (6)出土遺物(1/4)

352は甕である。

国産陶磁器 353～356は古瀬戸である。353は椀で口径14.0cmを測る。内面にトチン痕が残る。354は鉢皿である。口径11.2cm、器高2.5cmを測る。355は天目茶碗である。口径7.9cm、器高4.3cmを測る。小型の天目茶碗である。底部は削出し高台で糸切痕を残す。356は鉢であろう。

364～368は備前である。364・365は甕である。口縁は玉縁状を呈しており、間壁編年Ⅲ期後半と思われる。366～368は摺鉢である。口縁端部を三角形にするものとそうでないものがある。間壁編年Ⅳ期の前半であろう。

369は常滑の鉢である。口縁端部に沈線を施す。

輸入陶磁器 357～361は青磁椀である。362は削出高台の陶器で、内面に黒色の釉が施されている。ほかに口縁部が輪花状の白磁がある。

硯 363は断面が逆台形の小型の硯である。長さ6.6cm、幅3.8cm、器高0.8cmを測る。

SD 4 下層 (第31図380～392)

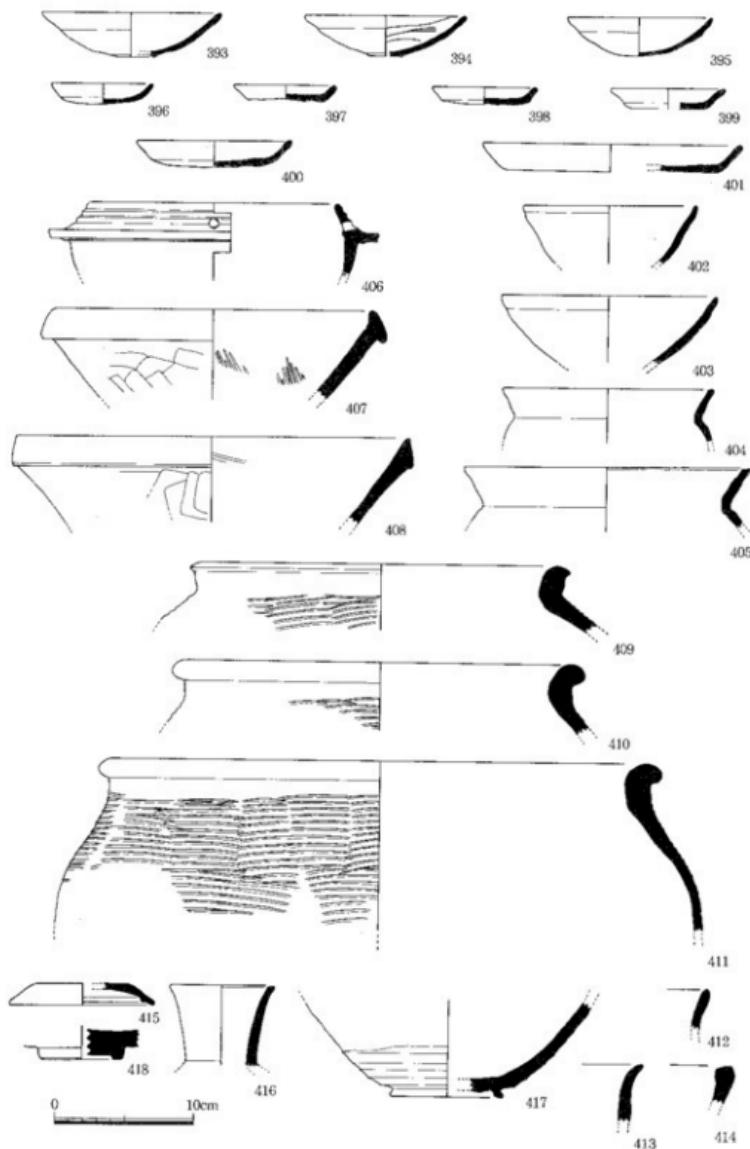
瓦器 380～381は椀である。口径10.8cm～11.7cm、器高2.8cm～3.0cmを測る。高台はない。尾上編年Ⅳ-3・4。

土師器 385～390は小皿である。口径5.8cm～8.2cm、器高1.2cm～1.8cmを測る。382～383は白色系の中皿である。382は口縁部にタールが付着する。

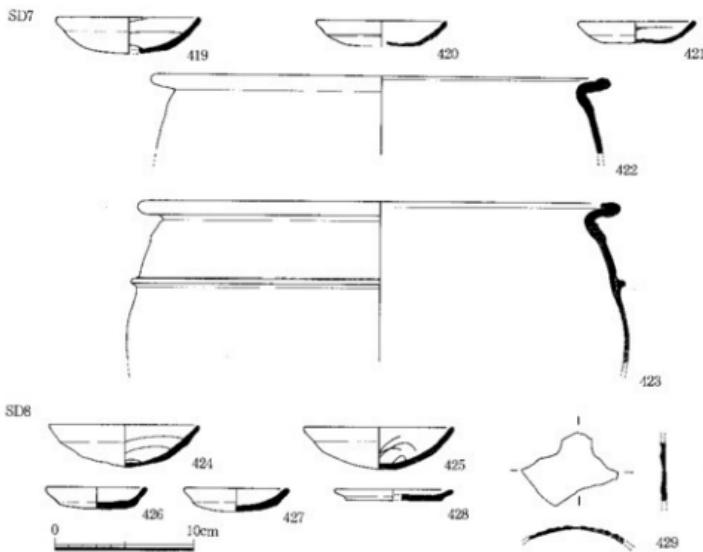
輸入陶磁器 391は白磁である。色調は灰白色で、高台を伴い見込み部に蓮華様の花文様がある。392は白磁の皿である。口縁部は口禿、体部下半から底部にわたって施釉されていない。横田・森田編年IX-2と考えられる。

SD 6 (第32図393～418)

瓦器 393～395は椀である。口径10.0cm～12.4cm、器高2.2cm～2.8cmを測る。



第32図 S D 6 出土遺物(1/4)



第33図 SD7・8出土遺物(1/4)

406は羽釜、407～408は摺鉢である。406は口縁に穿孔している。409～411は甕である。口縁端部を小さく外に折返すものと玉縁状のものがある。

土師器 402・403は杯である。口径は12.0cm～15.0cmを測る。色調は橙色である。400は皿である。口径10.3cm、器高1.9cmを測る。396～399は小皿である。口径7.0cm～7.8cm、器高1.1cm～1.5cmを測る。404・405は甕である。

須恵器 415は杯蓋、416は長頸壺である。杯蓋は内側の返りが小さい。

製塙土器 412～414は口縁が肉厚するもの、外反するものなどがある。

国産陶磁器 417は古瀬戸の平椀である。高台は貼付け高台である。

輸入陶磁器 418は龍泉窯系の青磁椀の高台である。

SD7 (第33図419～423)

瓦器 419は椀である。口径10.0cm、器高2.6cmを測る。420・421は皿である。口径8.0cm～9.0cm、器高1.5cm～1.8cmを測る。内面に暗文を施す。

土師器 422・423は羽釜である。器壁は薄く、口縁は「く」の字に外反し、端部を内側に折り込む。体部の鈞は、低い凸帯状である。色調はにぶい黄橙色で、大和型と考えられる。

S D 8 (第33図424~429)

瓦器 424・425は椀である。2個とも同一法量で、口径は10.6cm、器高は3.0cmを測る。尾上編年IV-4。

土師器 426・427は小皿である。口径は7.1cm~7.2cm、器高は1.5cm~1.6cmを測る。

国産陶磁器 428は占瀬戸の小皿で口径は8.0cm、器高は0.8cmを測る。器高が低く、偏平である。

鉄製品 429は用途不明の鉄製品である。断面はカーブをえがき、厚さ0.3cmを測る。

S D 9 (第34・35図430~495)

瓦器 430~451は椀である。器形は整っている。高台を伴うものと伴わないものがある。430~440は高台を伴うものである。口径11.5cm~12.2cm、器高2.8cm~3.0cmを測る。441~451は高台を伴わないものである。口径11.3cm~12.2cm、器高2.4cm~3.3cmを測る。いずれも尾上編年III-3にあたる。高台の高さが低いので、高台の有無による法量の変化は少ないが、高台がなく暗文が施されていないものは深い傾向にある。492は摺鉢である。口径は30.0cmを測る。口縁部の下のみにヘラ削りを行っている。口縁の形態から瓦質の摺鉢では早い時期であると思われる。

土師器 452~487は小皿である。口径6.8cm~8.4cm、器高1.2cm~1.8cmを測る。490・491は大和型の羽釜である。口縁をくの字に外反させ、端部を摘み上げるものと、内湾させ端部を外側に巻き返すものがある。

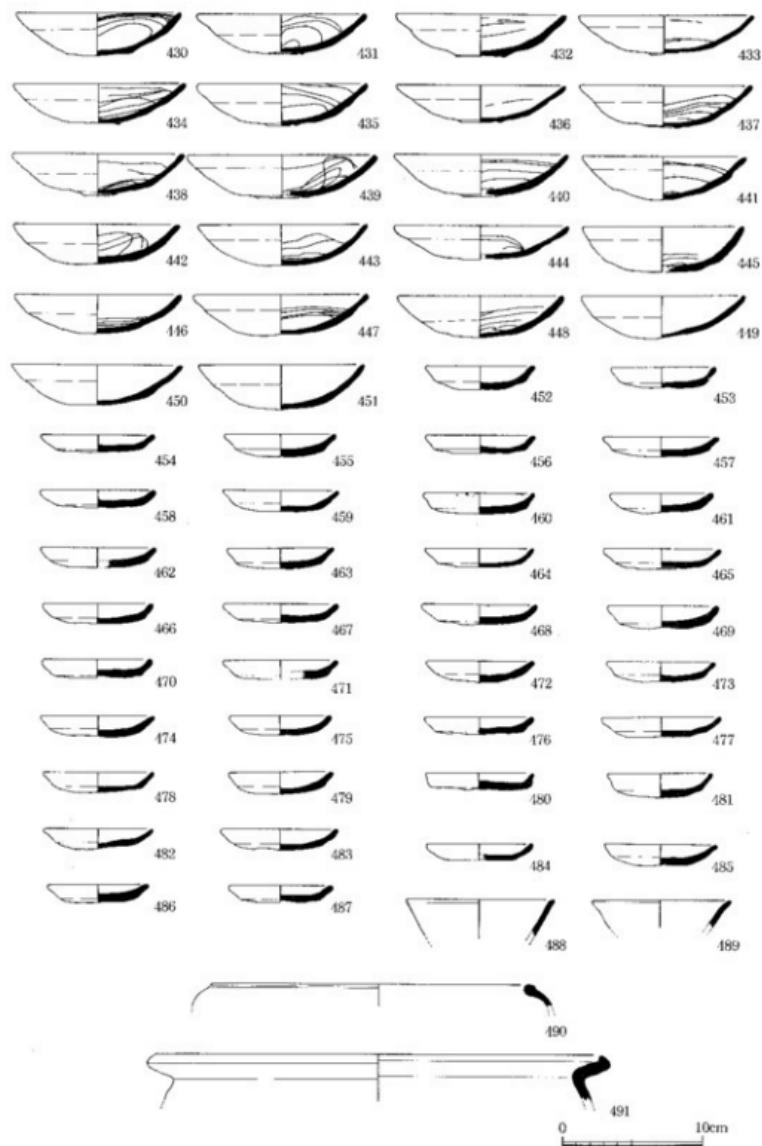
須恵器 493・495東播系の練鉢である。口縁端部は三角形を呈する。

輸入陶磁器 488は越州窯の青磁椀、489は白磁である。底部の施釉状態は不明ではあるが、外反する口縁の形態から横田・森田編年IX-1と思われる。

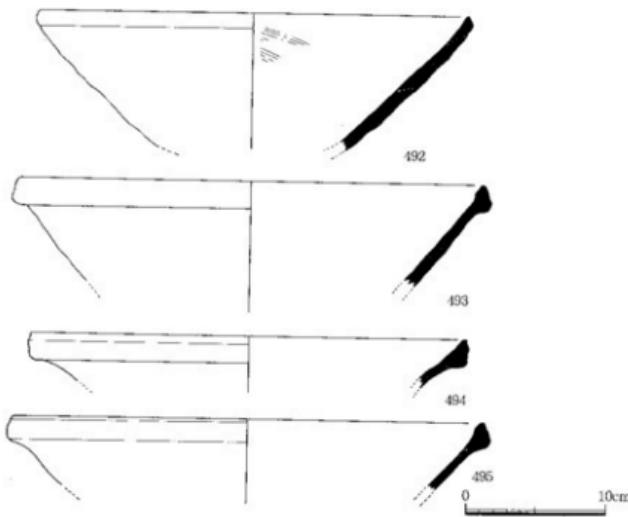
S D 11 (第36図496~502)

瓦器 496・497は椀である。口径10.9cm~11.2cm、器高2.5cm~2.6cmを測る。尾上編年IV-4。

土師器 498・499は白色系中皿、500は小皿である。491は大和型の羽釜である。色調は浅い黄橙色で、口縁端部外面に面を持ち内傾する。



第34図 S D 9(1)出土遺物(1/4)



第35図 SD 9 (2)出土遺物(1/4)

須恵器 502は東播系の練鉢である。

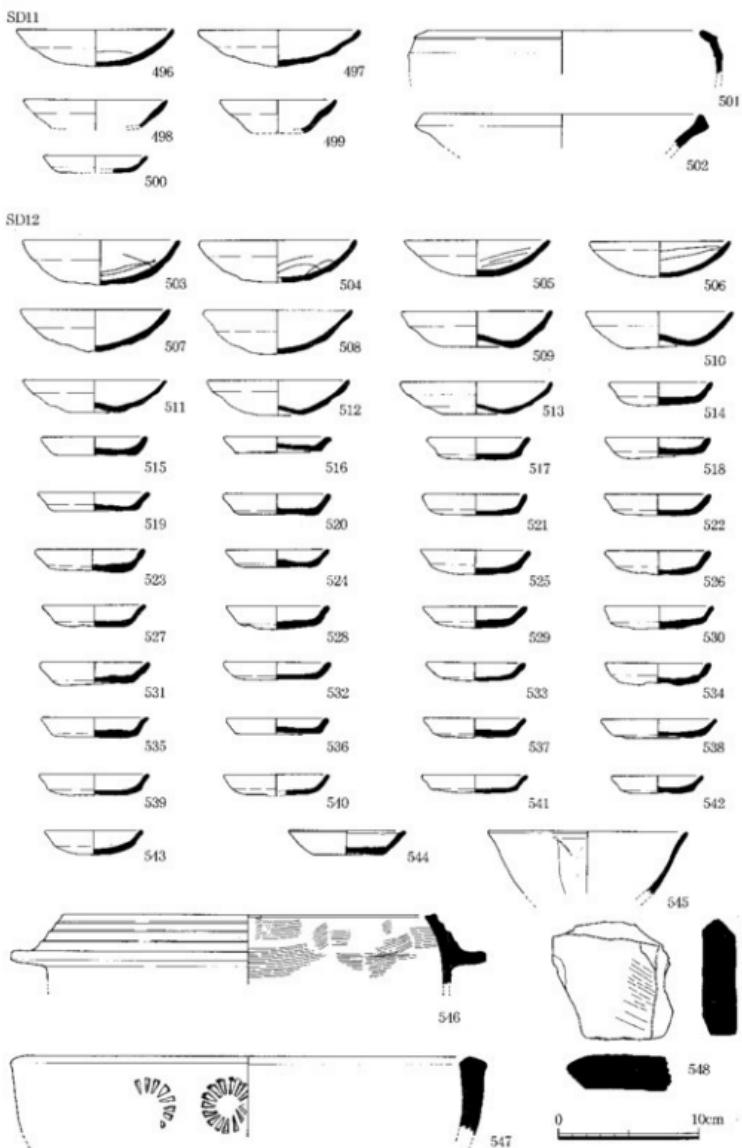
S D 12 (第36図503~548)

瓦器 503~508は椀である。口径9.8cm~11.0cm、器高2.5cm~3.1cmを測る。底部は尖底や平底があり、尾上編年IV-4と5が混じる。508は内面に暗文はない、底部尖底気味である。尾上編年IV-5と考えられる。546は羽釜である。口径は26.2cmを測る。547は火鉢である。口径は31.1cmを測る。外面に菊花模様のスタンプを押す。

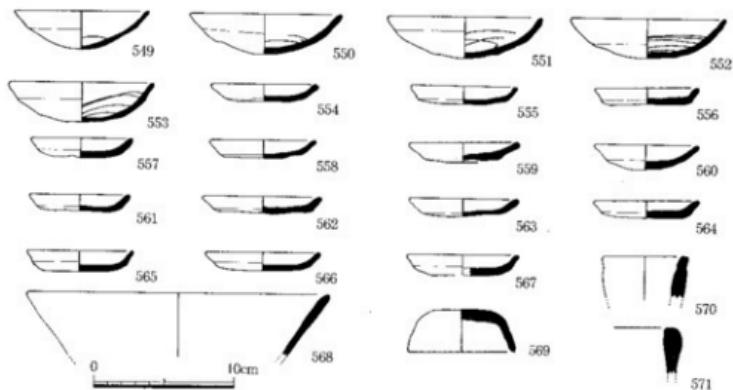
土師器 509~513は中皿である。口径10.0cm~10.1cm、器高2.1cm~2.6cmを測る。胎土は白色系上師器皿ほど精良ではない。色調は浅い黄橙色で器壁は薄い。口縁は横ナデ、体部は無調整で体部外面に指圧痕を残す。外面の調整は白色系上師器に似るが、内面は滑らかに仕上げられている。底部はヘソ皿状である。内型によって製作されたものであろう。514~543は小皿である。口径6.4cm~8.0cm、器高1.3cm~1.8cmを測る。

瓦 548は瓦質の平瓦である。

輸入陶磁器 544は白磁の皿である。口縁端部は口禿、体部過半から底部にわたって施釉されていない。横田・森田編年IX-2である。545は青磁の椀で



第36図 SD11・12出土遺物(1/4)



第37図 SD 13 出土遺物(1/4)

ある。口径は14.0cmを測る。外面に連弁模様を施す。横田・森田編年I-5・bと考えられる。

S D 13 (第37図549~571)

瓦器 549~553は椀である。口径9.6cm~10.7cm、器高2.9cm~3.0cmを測る。IV-4・5。

土師器 554~567は小皿で口径7.0cm~8.3cm、器高1.1cm~1.8cmを測る。568は白色系の大皿である。

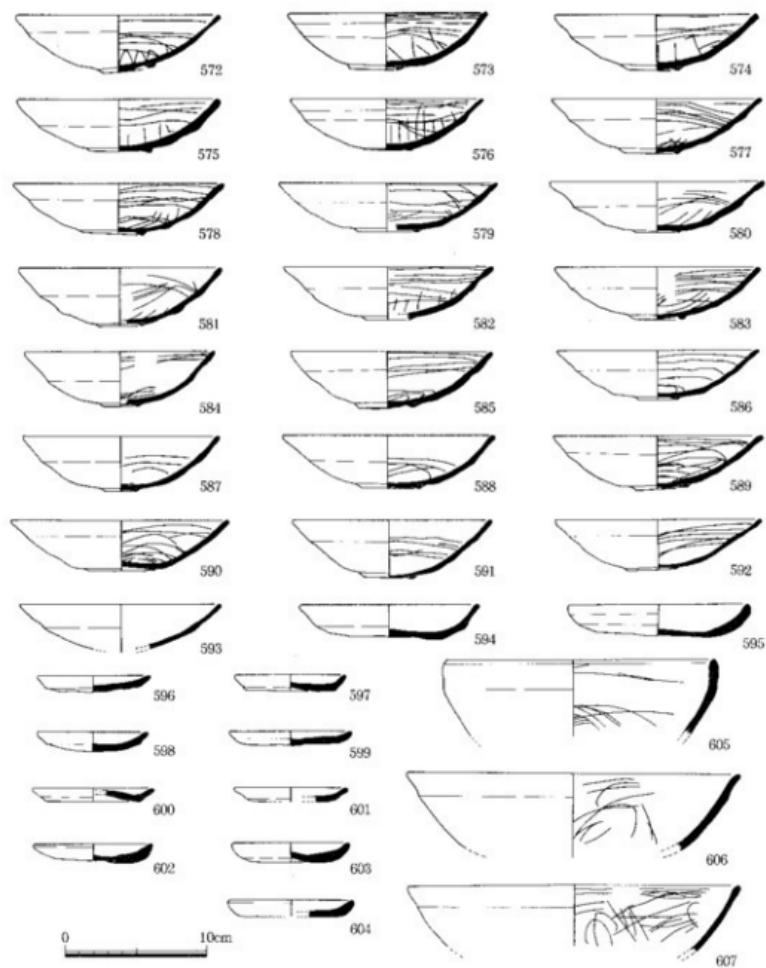
須恵器 569は蓋である。口径7.4cm、器高3.0cmを測る。

製塙土器 570は口縁端部が薄く、571は肉厚になっている。

S K I (第38・39図572~608)

瓦器 572~593は椀である。口径は13.1cm~15.3cm、器高は3.5cm~4.1cmを測る。形態から4種類に分類できる。a類は、見込み部に平行状暗文を施す。b類は、鋸歯状暗文を施す。c類は、螺旋状暗文を施す。d類は、見込み部に暗文がなく、口縁が内湾気味である。尾上編年III-3とIV-1である。605~607は鉢である。605は口縁が直立する厚手の鉢である。口径は18.8cmを測った。606・607は椀を大型化した形である。両方とも口径23.4cmを測る。

土師器 口縁が外反するものと、口縁端部が直立する厚手のものがある。594・595は中皿である。594は口径12.3cm、器高2.4cmを測る。595は口径12.7cm、器高2.3cmで、器壁が厚く外面に二重ナデを施す。596~604は小皿である。

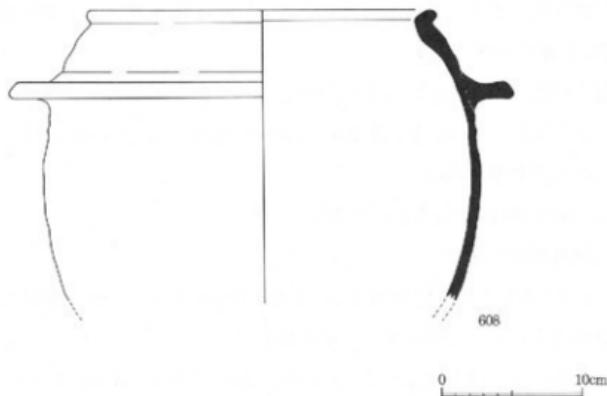


第38図 SK 1(1)出土遺物(1/4)

口径7.7cm～8.2cm、器高1.1cm～1.5cmを測る。小皿にも同じように調整の違いがある。しかし、土師器皿は調整が異なっても、法量はほぼ同じである。608は羽釜である。口縁部を折返し、外反している。口径は24.1cmを測る。

SK 2 (第40図609～612)

縄文土器 609は深鉢の破片と思われる。2条の沈線のうち1条は下方に屈



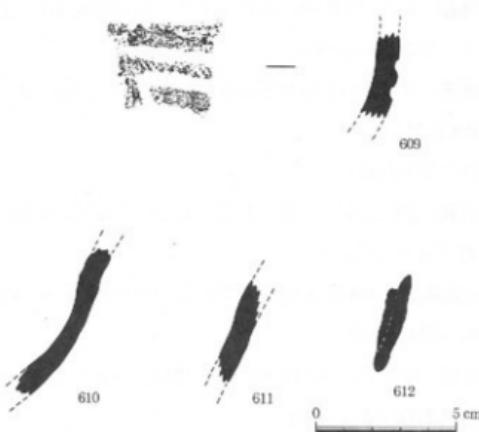
第39図 SK 1 (2)出土遺物(1/4)

折している。沈線の間にLR縄文を施す。色調は外面にぶい褐色、内面にぶい黄褐色である。胎土は1mm～5mmの石英・長石を含んでいる。610は浅鉢と思われる。色調は、外面褐色、内面灰黄色である。胎土は1mm～3mmの石英・長石・くさり礫を含む。

611の色調はオリーブ黒色と灰黄色で、胎土は1mm～3mmの石英・金雲母・長石・角閃石を含む。612の胎土・色調は611と同じである。貼付痕がある。609は縄文後期か晩期と思われる。

SK 3 (第41図613～648)

瓦器 613～631は椀である。口径9.9cm～10.9cm、器高2.7cm～3.3cmを測る。



第40図 SK 2 出土遺物(1/2)

内面に暗文を施すものと施さないものがある。尾上編年IV-4・5と考えられる。647は火鉢である。

土師器 632は中皿である。633は白色系のヘソ皿である。634・646は小皿である。口径7.0cm～7.6cm、器高1.2cm～1.8cmを測る。635・636の内面にはヘラ状工具による調整痕が残る。

鉄製品 648は断面が長方形の鉄製品である。

S P 2 (第41図649～651)

瓦器 649は椀である。口径10.1cm、器高3.0cmを測る。内面に簡単な暗文がある。焼成は良いが、器壁は厚い。尾上編年IV-5。

土師器 650・651は小皿である。口径は6.9cm～7.0cm、器高は1.4cm～1.5cmを測る。650は灯明皿と思われる。

S P 6 (第41図652)

土師器 652は白色系の小皿である。口径は8.4cm、器高は1.7cmを測る。

S P 8 (第41図653・654)

土師器 653・654は白色系の小皿である。口径は8.0cm～9.2cm、器高1.7cm～2.7cmを測る。

S P 28 (第41図655)

土師器 655は浅い小皿である。口径は7.6cm、器高は0.9cmを測る。

S P 30 (第41図656)

国産陶磁器 656は天目茶碗である。口径は10.0cmを測る。

S P 41 (第41図657)

土師器 657は小皿で口径6.2cm、器高1.1cmを測る。

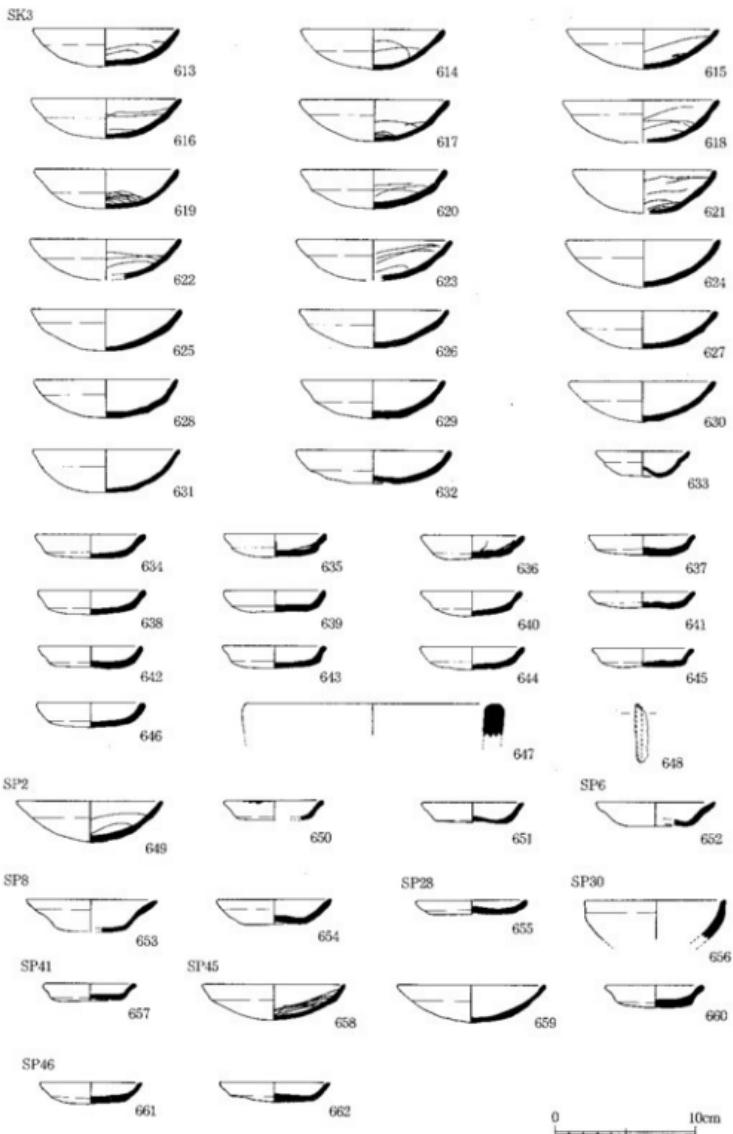
S P 45 (第41図658～660)

瓦器 658・659は椀である。口径10.0cm～10.4cm、器高2.6cm～2.7cmを測る。尾上編年IV-5。

土師器 660は小皿で口径6.9cm、器高2.6cmを測る。

S P 46 (第41図661～662)

土師器 661・662は小皿である。口径7.1cm～7.9cm、器高1.4cm～1.5cmを測る。



第41図 S K 3・柱穴(1)出土遺物(1/4)

S P 134 (第42図663)

國產陶磁器 663は甕である。口径32.0cmを測る。色調はにぶい赤褐色である。口縁は縁帶の形態を示している。常滑と思われる。

S P 111 (第42図664・665)

土師器 664・665は小皿である。口径7.6cm～9.0cm、器高1.0cm～1.3cmを測る。

S P 476 (第42図666～668)

土師器 666～668は小皿である。胎土は細かく軟質で、色調はにぶい黄褐色である。器形は歪みがあり、橢円形である。口径8.0cm～9.4cm、器高1.4cm～1.8cmを測る。

S P 477 (第42図669～676)

瓦器 676は椀である。口径は15.0cmを測る。内面にヘラ磨きを施す。

土師器 669～678は小皿である。S P 476出土土師器小皿と同じ胎土で、器形も同じで歪みがあり橢円形である。口径8.0cm～9.4cm、器高1.4cm～1.6cmを測る。

S P 470 (第42図677～679)

土師器 677～679は小皿である。口径は8.6cm～9.4cm、器高は1.6cm～1.8cmを測る。胎土・色調ともS P 476・477と同じだが、口縁の立ち上がりが異なる。

S P 471 (第42図680・681)

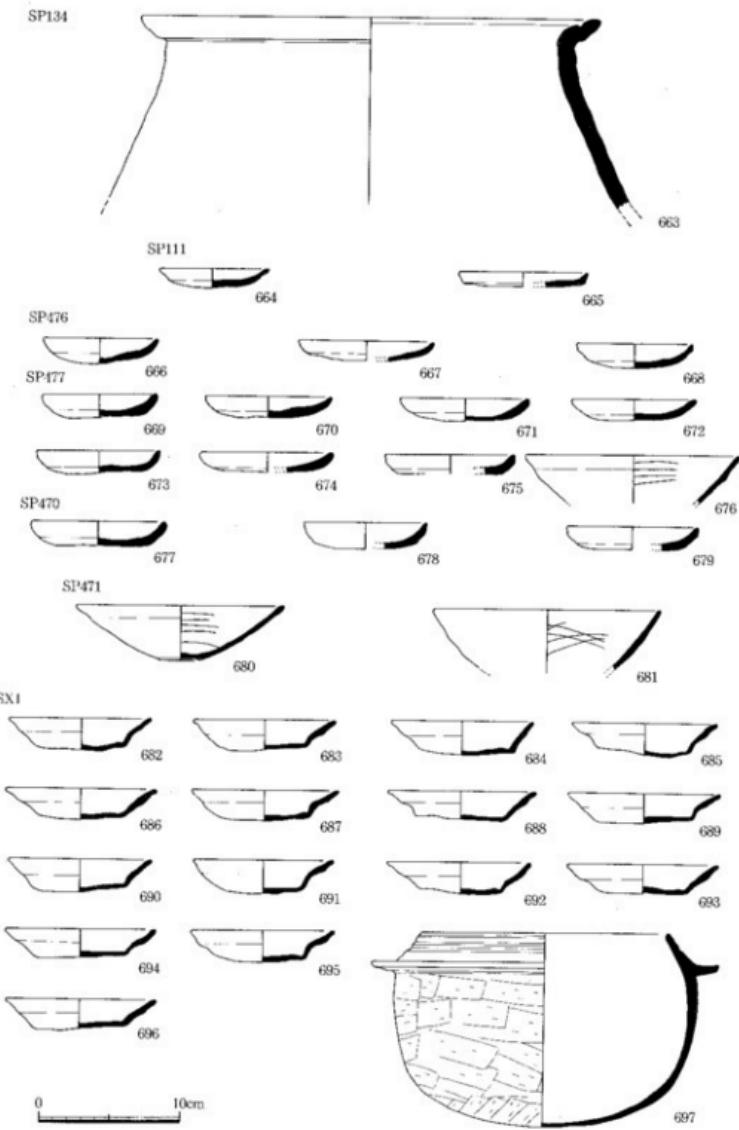
瓦器 680・681は椀である。680は口径14.7cm、器高3.9cmを測る。

S X 1 (第42図682～697)

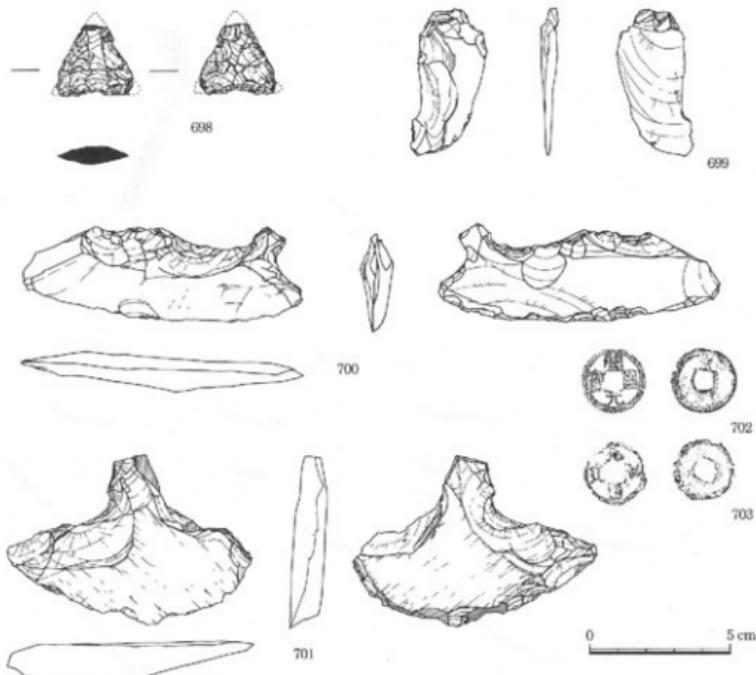
瓦器 697は小型の羽釜である。口径は17.5cm、器高は13.8cmを測る。口縁端部が少し立ち上がり気味である。体部外面はていねいなヘラ削り、内面はヘラ削りの後ナデ消している。

土師器 682～696は中皿で口径は9.8cm～10.6cm、器高は2.0cm～2.4cmを測る。色調は橙色で、胎土は白色系の土師器よりやや粗く、くさり礫・金雲母・小石を少量含む。

成形方法は、左手に粘土を持ち右手の親指を内側にし、人差し指を鍵状に曲げ押さえながら成形し、後で口縁部を右回りに横ナデする。底部内面には右手



第42図 柱穴(2)・SX1出土遺物(1/4)



第43図 石製品・錢貨(1/2)

親指でできた圓線が残る。ナデあげたところは膨らんで丸くなり、その他の部分には強い指圧痕が残る。底部外面には板目痕が残っている。

歪みは大きいが調整は同一で、同一工人によって製作されたものと考えられる。

その他の遺物（第42図698～704）

石製品 サヌカイトは多く出土しているが、製品と認められるのは5点のみである。いずれも地山直上から出土した。

698は石鎌である。平基無茎鎌である。699～702は石匙である。699は縦型、700～701は横型である。

錢貨 702は唐錢の開元通宝(初鑄621)である。703は宋錢の元祐通宝(初鑄1086)である。

第3章　まとめ

遺構については、部分的に二重の堀で囲まれた中世城館を検出した。遺構の時期は14世紀ごろで、楠木氏が活動していた時期と合致しており、関連のある遺構と考えられる。建物は3棟あり、建物群は調査区中央西側に広がる考えられる。SB2は方形に掘込だ遺構内に礎石を並べた竪穴建物で、西日本では検出例が少ない遺構である。今回の調査区は遺跡の一部であり、尾根全体に遺跡が広がるものと考えられる。

遺物については、縄文時代から中世に至る遺物が出土した。しかし、遺物のほとんどは中世であり、多くの瓦器、土師器、国産陶器、輸入陶器が出土した。国産陶器については、東播系須恵器・常滑・備前・古瀬戸が出土している。遺物は日用雑器を中心であるが、輸入陶磁器の青磁や白磁の多さが一般的な館でないことを物語っている。

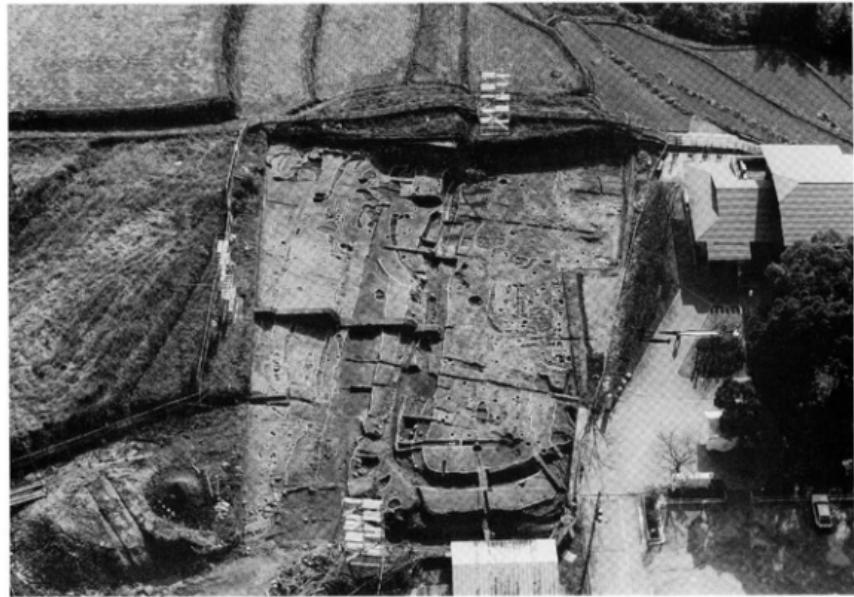
SK2からは縄文土器が出土しており、ほかにも弥生土器や円筒埴輪と思われる遺物も包含層から出土するなど、本遺跡周辺には縄文、弥生、古墳などの遺跡が存在したと思われる。

今回の報告書に掲載できなかった部分や十分な検討がいたらなかったものについて、あらためて報告したいと思う。

図 版



遠景（北から）



全景（北から）



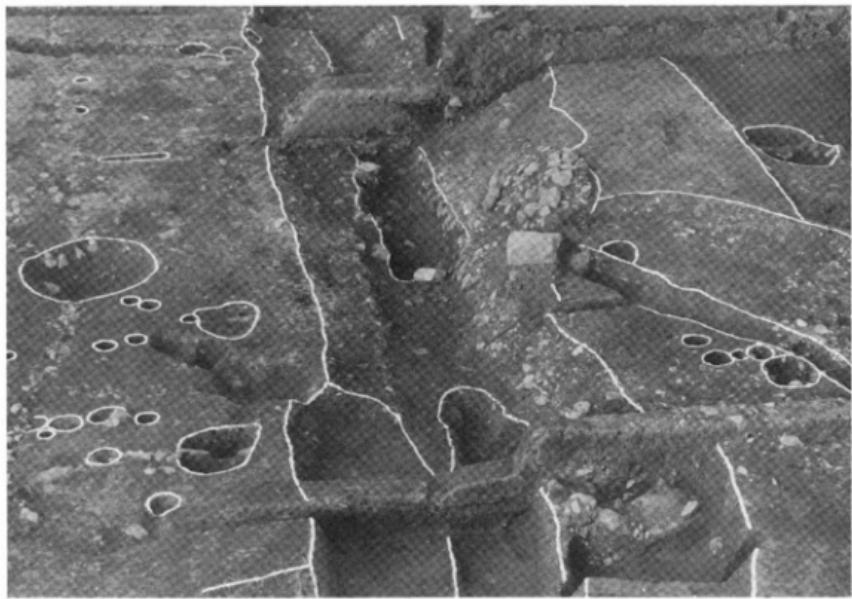
SD2 (北から)



SD2・SD1



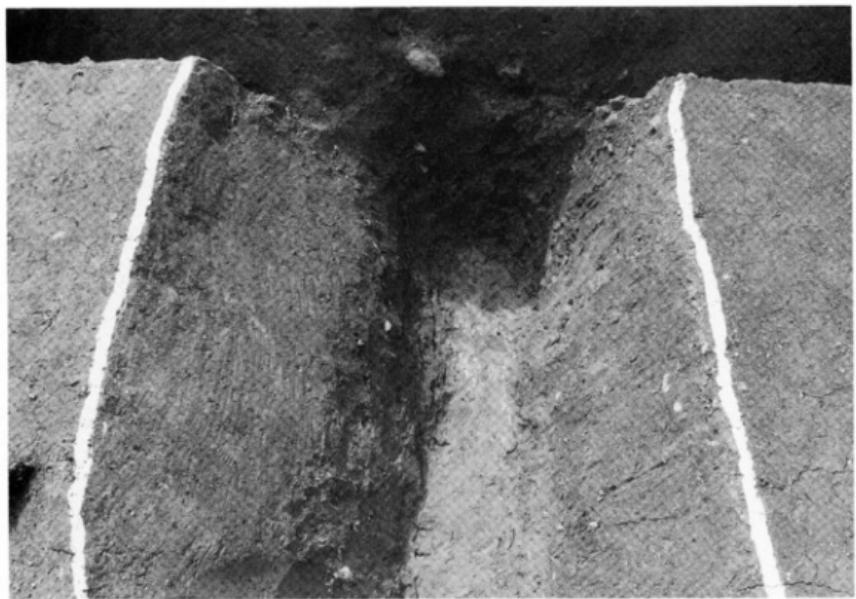
S V 1



S V 2



S D 4 • S D 3



S D 3



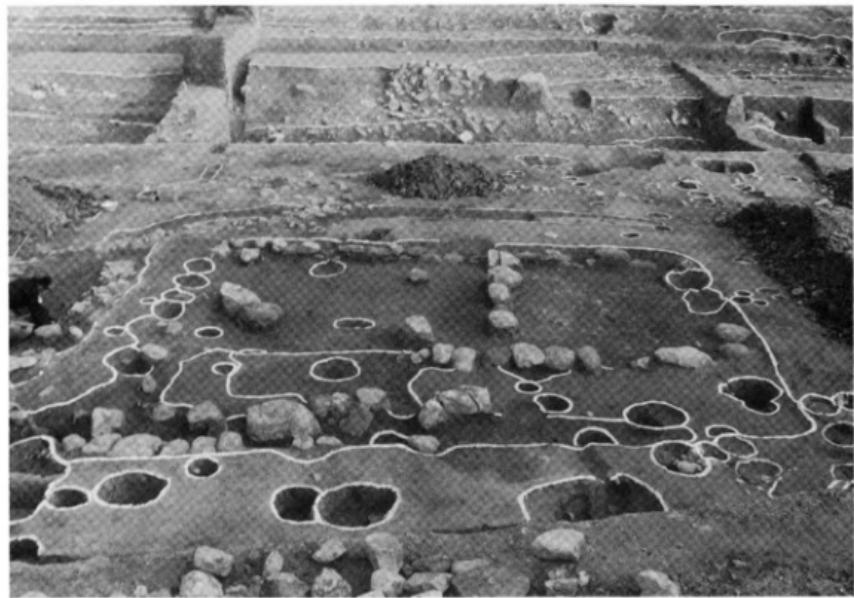
S D 4



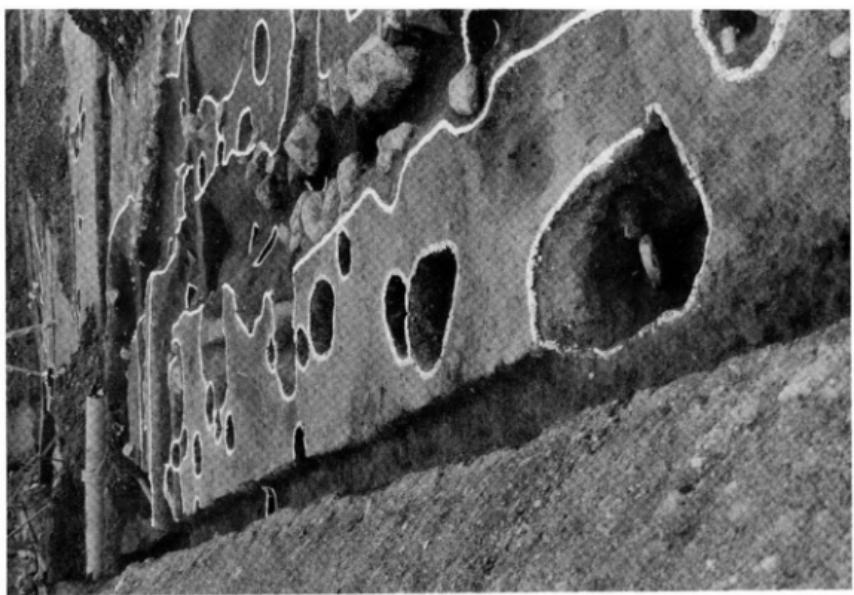
S D 4 遺物出土状況



SB 1 (東から)



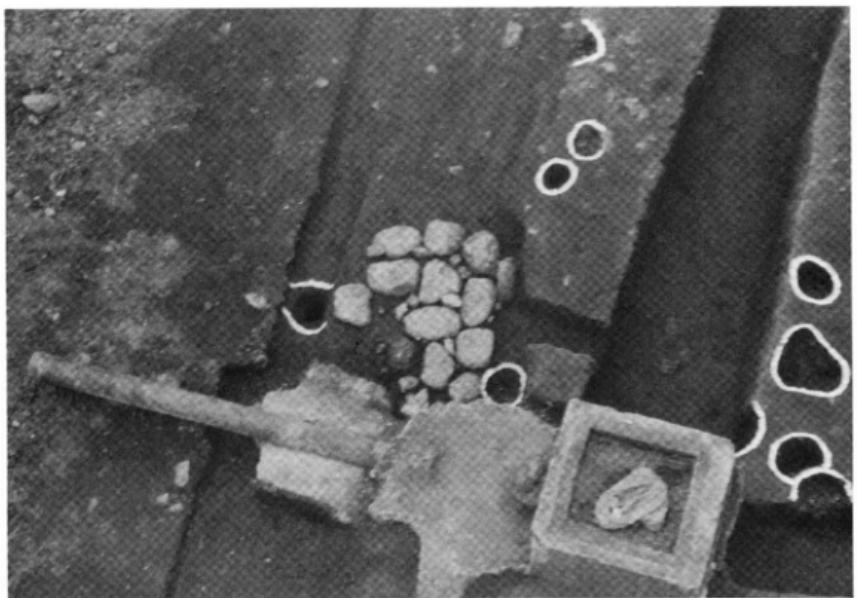
SB 2 (西から)



S B 3 (南から)



S S 1



S S 2



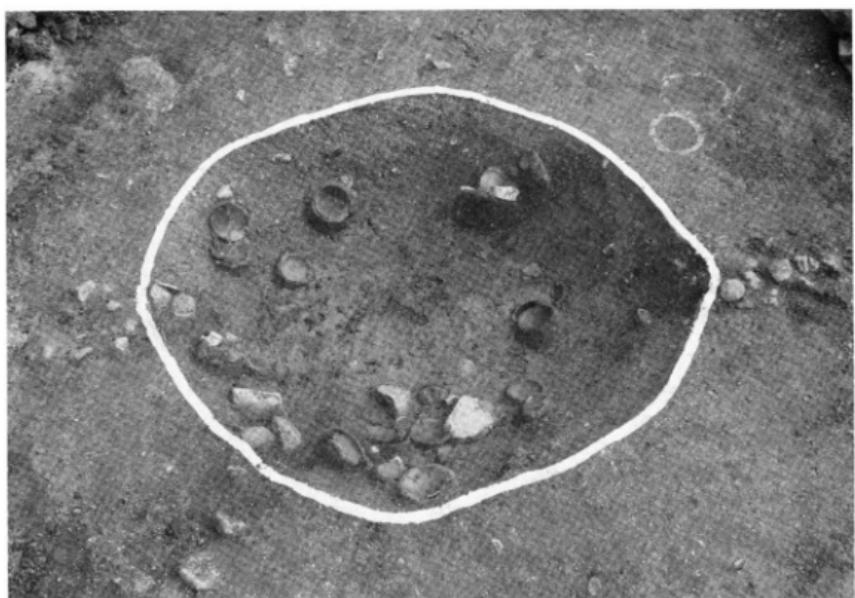
S S 3 (北から)



S D 12・11遺物出土状況



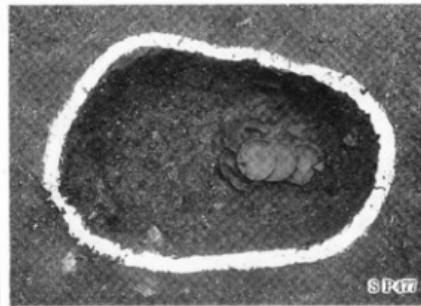
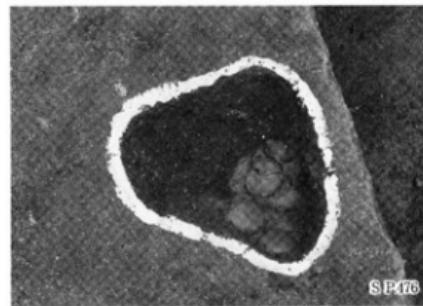
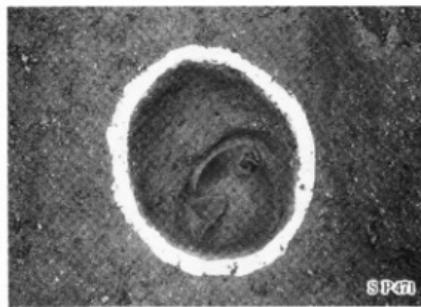
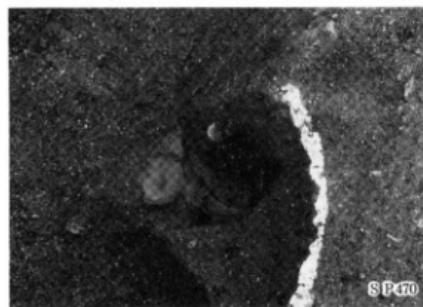
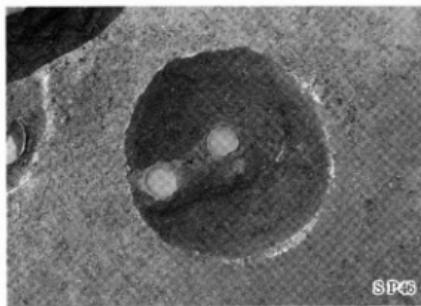
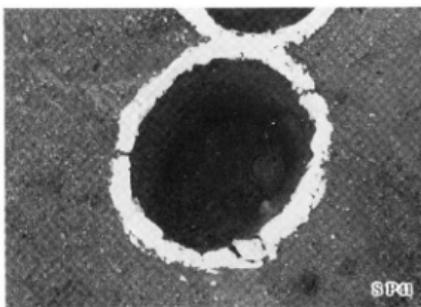
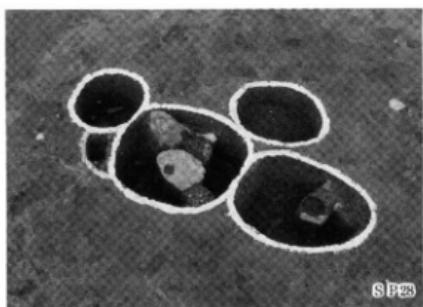
S D 9 遺物出土状況



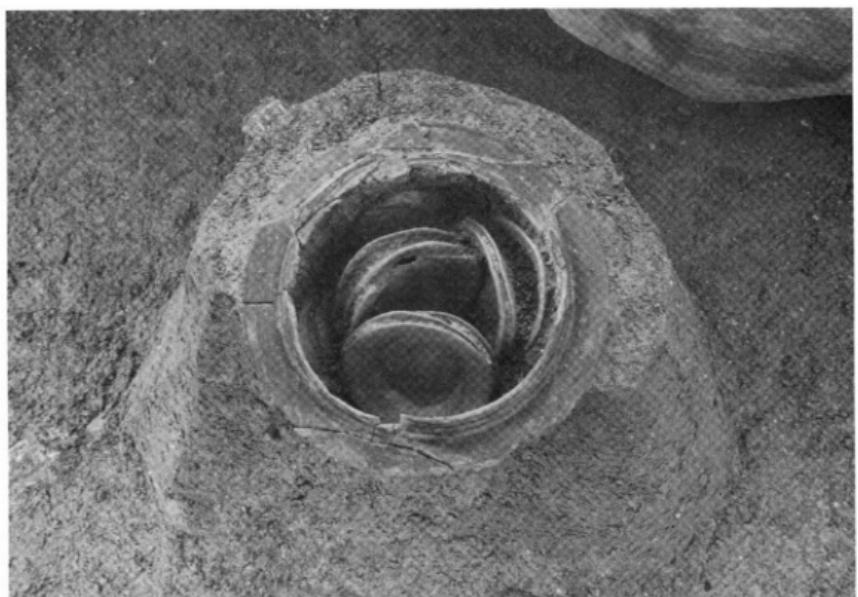
S K 1 遺物出土狀況



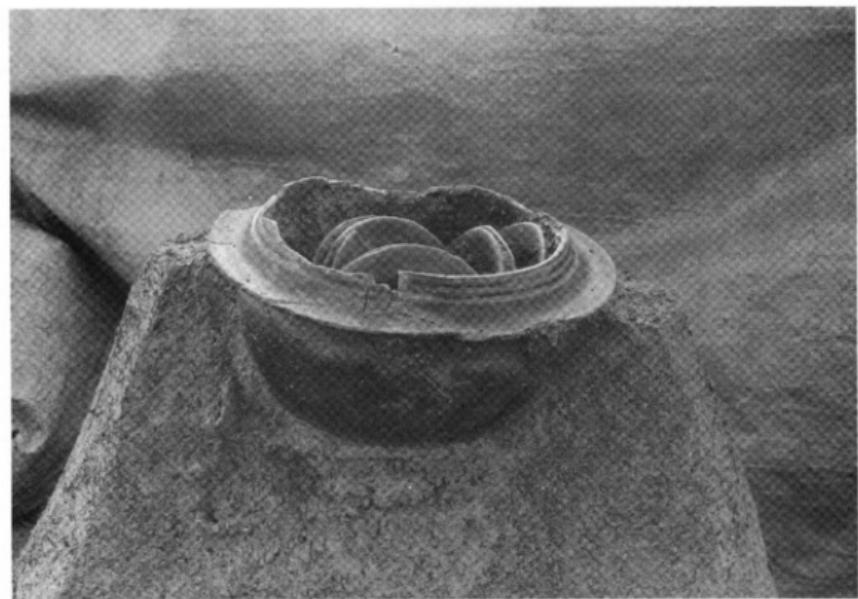
S K 3 遺物出土狀況



柱穴遺物出土狀況



S X 1 遺物出土状況（上から）



S X 1 遺物出土状況

報告書抄録

ふりがな	たんじょうもいせきはくつちょうさがいよう						
書名	誕生地遺跡発掘調査概要						
著者名							
巻次	I						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	西山昌孝						
編集機関	千早赤阪村教育委員会						
所在地	〒585 大阪府南河内群千早赤阪村大字水分263 TEL 0721-72-1300						
発行年月日	西暦 1995年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東經 ***	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
楠公誕生地	大阪府南河内郡 千早赤阪村大字 水分	27383	—	34° 27° 38°	135° 37° 15°	1991.08.20 1991.03.31	4,617	ホール建設に 伴う調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
楠公誕生地	城館	鎌倉 ～南北朝	掘立柱建物 竪穴建物 掘 土塹	2棟 1棟 2条	瓦器、十輪器、須磨器、 常滑、備前、吉瀬口、 青磁、白磁	部分的に二重の堀を 巡らした中世城館

